

ペネロペ

「三幕・喜劇」

サマセット・モーム 作

(田原 創 訳)

登場人物

ペネロペ

オフアレル医師（ペネロペの夫、ドイツキ）

ゴーライトリー博士（ペネロペの父、数学者、チャールズ）

ゴーライトリー夫人（ペネロペの母、イザベル）

ダベンポート・バーロー氏（ペネロペの母方の伯父）

ファーガソン夫人（オフアレル医師の不倫相手、海軍士官の妻、エイダ）

ビーズワース氏（弁護士）

ワトソン夫人（オフアレル医師の患者）

オフアレル医師の男性患者

ペイトン（オフアレル家のメイド）

時…一九〇八年

第一幕

ジョン・ストリートにあるオフアレル家の客間。家具の備え付けは非常にきれいだが贅沢ではない。オフアレル夫妻は適度の収入がある若い夫婦。

夜、六時と七時の間。

小ざつぱりしたメイドのペイトンがダベンポート・バーロー氏を通す。

バーローは中年で背の低い尊大な人物。かなり禿げていて顔が赤く、きちんとカールした小さな口髭を生やしている。流行の先端をいく服装をしている。態度は小難しそうでもったいぶっている。部屋に誰かいるのではないかと思って進み出る。誰もいないのが分かると、立ち止まってペイトンを見る。どうして誰にも迎えてもらえないのか、彼にはさつぱり分らない。

バーロー 「驚いた口調で」オフアレル夫人はここじゃないのかね？

ペイトン はい、旦那様。

バーロー ん……。わしが来たことを知らせてくれないかね？

ペイトン オフアレル夫人はお留守でございます、旦那様。

バーロー 留守だと……？ だが……。

ペイトン オフアレル夫人がおっしゃってましたが、どうぞお掛けになっておくつろぎくださいませんか？ 『モーニング・ポスト』をお持ちするようにとのことでございます。

バーロー 「尊大に」どうしてオフアレル夫人が夜の六時にもなってわしがまだ『モーニング・ポスト』を読んでいないなどと思うのか、わたしにはさつぱり分らん。

ペイトン 「平然として」オフアレル夫人がおっしゃってましたが、ハイボールをお召し上がりになりますか、旦那様？

バーロー だが、オフアレル夫人はいつ戻るのかね？

ペイトン 全く存じません、旦那様。

バーロー だが、あの子は今日の午後電報を寄こして、すぐ会いに来てほしいと言ったんだぞ。

ペイトン はい、旦那様。その電報はわたくしが郵便局に持ってまいりました。

バーロー あの子が出掛けてしまうとはいつになく大変なことのようだな。かなり重大な問題だったんだ。

ペイトン 「かしこまって」はい、旦那様。

バーロー よろしい、座って待つことにしよう。だが、長くはいられないんだ。晩飯を食べる予定が……いや、何でもない。

ペイトン かしこまりました、旦那様。

ペイトンは出て行く。バーローは鏡のところまで行くと、ポケットから小さなブラシを取り出して、口髭にブラシをかける。ペイトンがデカンター、サイフォンとグラスを載せた小さなトレイを持って再び入って来る。

バーロー ああ、ありがとう。『モーニング・ポスト』を持って来ると言ってたよな？

ペイトン はい、旦那様。

ペイトンは『モーニング・ポスト』をバーローに手渡す。

バーロー ああ、ありがとう。

ペイトンは出て行く。バーローは自分でハイボールを作ると、新聞の社交欄に目を止め、自己満足の笑みをちよつと浮かべながら読み始める。

バーロー 「半ば自分に聞かせるように」「セント・アース公爵夫人、昨日ウエールズ帰郷。ミアズトン侯爵夫人、グローブナー・スクエア八十九番地到着。セルロ侯爵夫人とエリナー・キング夫人、今朝パリ出発。」

ペイトンに続いてゴーライトリー夫人が入って来る。ゴーライトリー夫人は中年の非常にでっぷりした温厚な女性である。非常に活動的だが、息切れする。急な坂を駆け上って来たばかりだという印象を頻繁に与える。ダベンポート・バーローの妹である。

ペイトン ゴーライトリー夫人です。

バーロー イザベル！

ゴーライトリー夫人 来てらしたの、ダベンポート？ ペネロペはどこかしら？

バーロー 「世界で最も驚くべきことでもあるかの様に」留守なんだ！

ゴーライトリー夫人 「びっくりして」留守ですって？

ゴーライトリー夫人は訊きたい風にペイトンの方を向く。

ペイトン オファレル夫人がおっしゃってましたが、どうぞお掛けになっておくつろぎくださいませんか、奥様？ 『チャーチ（教会）・タイムズ』をお持ちするようにとのことでした。

バーロー だが……。

ペイトン 「平然として」オファレル夫人がおっしゃってましたが、濃いお茶をお召し上がりになりますか、奥様？

ゴーライトリー夫人 オファレル夫人が出掛けてしまったなんて驚きだわ。わたしが来るのを知ってるはずなのに。

ペイトン 「ゴーライトリー夫人に新聞を手渡しながら」はい、奥様。

ゴーライトリー夫人 「新聞を取りながら」これは何？

ペイトン 『チャーチ・タイムズ』でございます、奥様。

ゴーライトリー夫人 「バーローを苛立たしく見ながら」まあ、ありがとう……。お茶を一杯いただくわ、お願い。

ペイトン かしこまりました、奥様。

出て行く。

ゴーライトリー夫人 ペネロペがわたしに『チャーチ・タイムズ』を読めというのはい体どうしてかしら。

バーロー あの子から電報をもらったんだ。

ゴーライトリー夫人 わたしもよ、すぐに来てほしいってね。「一筋の手掛かりを発見して」恐らく、『チャーチ・タイムズ』を読めば分かるんだわ。

バーロー 馬鹿な。『チャーチ・タイムズ』がアナスタシア大公妃と何の関係があるというのかね？

ゴーライトリー夫人 ねえ、ダベンポート、何を言ってるの？

ペイトンがゴーライトリー博士の来訪を告げ、すぐに出て行く。ゴーライトリーはきちんとしてきばきした白髪の高背の背の高い痩せた男である。実にさっぱりと、きちんとした身なりで、数学の教授ではあるが、弁護士か医者であつてもおかしくない。髭はきれいに剃つてある。

ペイトン ゴーライトリー博士です。

ゴーライトリー やあ、ダベンポート！ 「妻に向かつて」ねえ、君、まさかここで君に会うなんて思つてもいなかったよ。アルバートホールで伝道師協会の会合があるんだと思つてた。

ペイトンが茶器セットに大麦湯（精白玉麦で作る煎じ薬、子供の下痢止めにすることが多い）の入ったグラスと『アテナイウム（学術クラブ）』を一冊載せたトレーを持って入って来る。

ゴーライトリー夫人 ああ、ありがとう。

ペイトン 「ゴーライトリーに向かつて」オファレル夫人がおっしゃってましたが、大麦湯をお召し上がりになりますか、旦那様？

ゴーライトリー 大麦湯だって！

ペイトン 『アテナイウム』をお持ちするようにとのことでした。今週号は手に入りませんでした、旦那様、先週号がございまして、オファレル夫人はこちらでも同じだと思いで。

ゴーライトリー 「かすかにほほえんで」ありがとう。随分手を煩わせたね。

ペイトン ありがとうございます、旦那様。

出て行く。

ゴーライトリー 先週の『アテナイウム』と大麦湯一杯で、ペネロペはわたしに一体どうしてほしいのかな？

バーロー はてと、一つは飲んで、もう一つは読んでもらいたいんでしょうな。

ゴーライトリー 「妻に向かつて」ねえ、君、わたしの好きな飲み物が大麦湯だと考えるように君がわたしたちの唯一の子供を育てたなんて理解に苦しむよ。

バーロー どうやら、ペネロペは君にも来てもらいたかったようだな。

ゴーライトリー あの子から電報をもらってね。

バーロー 君も？ 一体どうしてあの子は君に電報を打ったのかな？

ゴーライトリー夫人 あの子がここにいないなんて、ただ事じゃないわ。すごく心配なの。

ゴーライトリー いや、正直言うと、何のことやらさっぱり分からないものだから、タクシーに飛び乗ってクラブからすぐにやって来たんだ。

ペイトンに続いてビーズワースが入って来る。ビーズワースは物腰の穏やかな中年の事務弁護士である。

ペイトン ビーズワース様です。

ゴーライトリー こりや驚き桃の木山椒の木だ。

バーロー なあ、チャールズ、そんな俗っぽい言い方はせんでくれ。我々の世界ではもうすたれている。

ビーズワース 「ゴーライトリー夫人と握手しながら」ペネロペからすぐに来てほしいという電報をもらいましてね。「ペイトンの方を向いて」オファレル夫人にわたしが来たことを知らせてもらえるかな？

ゴーライトリー あの子は留守だよ。

ペイトン オファレル夫人がおっしゃってましたが、おくつろぎくださいませんか、旦那様？ お読みになりたければ、『ロー（法律）・タイムズ』がございませぬ。ポートワインをお召し上がりになりますか、旦那様？

ビーズワースは当惑してほかの面々を見回す。

ゴーライトリー ぜひポートワインを一杯取りたまえ。わたしの大麦湯と交換しよう。ビーズワース 「ペイトンに向かって」頼むよ。

ペイトン 「ビーズワースに新聞を手渡しながら」かしこまりました、旦那様。

出て行く。

ビーズワース 『ロー・タイムズ』をどうしてほしいんですかね？

ゴーライトリー ペイトンから先週の『アテナイウム』を受け取った時、わたしも同じ質問をしたんだ。そうしたら、ダベンポートが抜群の明敏さで答えた。

「読め」ってね。

ビーズワース ペネロペが何を望んでいるのか、あなたはご存じなんですか？ 電報でうかがえるのは、わたしに会いたいのは昔からの友人としてではなく、一家の事務弁護士としての公的な資格のためのようですよ。

ゴーライトリー わたしには見当もつかない。あの子の電報は全く不可解だ。

ゴーライトリー夫人 あの子ったら、帰ってくればいいのに。ひどく不安になつてきたわ。

バーロー 「いささか勿体ぶって」わしが君たちを安心させてやれると思うよ。すべての事情を説明できる立場にあるからね。あの子が寄こした電報で完全に明確だ。恐らく君たちも知っているだろうが、アナスタシア大公妃はディッキーの患者だ。大公妃が患者にいらなんて、実に素晴らしいことだ。わしは大公妃に会ったことはないが、たまたま妃の一族の何人かと知り合いで、妃は非常に洗練された感じのいい女性ようだ。ディッキーにはいつも言つとるのだが、ああいうのがあれが持つべき患者なんだ。中産階級の連中は医者のためにならんのだ。

ゴーライトリー さあダベンポート、その先を聞かせてください。

バーロー さてと、アナスタシア大公妃がペネロペと知り合いになりたいと言つたらしい。妃としては実に素晴らしい率直な行動で、いかにも妃らしい。もちろん、妃はディッキーがやったすべてのことで感謝している訳だが。あれが奇跡的な治療を施して、恐らく妃はペネロペがわしの姪だということを聞いたんだろうな。これは常に判断の基にできる格言だが、「王族は何でも知っている」ということだ。要するに、妃がここに昼食を食べに来るということだ。もちろん、ペネロペはこうしたことについて何も知らんから、非常に興奮した状態でわしを呼んだんだな。それが精一杯のところだ。わしはあの子に何でも教えてやれる。わしは生まれてからずっとそういう世

「界で暮らしてきたんだ。特別に誇らしいことではない——たまたまそういう生まれだというだけで——わたしはたまたま紳士なんだな。それなりの家柄だ。まあ、それで決まりだな。」

ゴーライトリー 「でも、ペネロペがそれを全部電文にしたとおっしゃるんですか？ 全財産かかったに違いありませんね。」

バーロー 「もちろん、もうちよつと簡単に書いてあったが、今のが要旨だ。」

ビーズワース 「王族が昼食に来るからといって、どうしてわたしを呼んだのか分かりませんね。出て来るのは実に具合が悪かったです。わたしに会うために待っている人間がたくさんいたもので、彼らをかやすために裏口から脱け出すしかなかったんですから。」

ゴーライトリー 「あの子があなたに送った電報には正確に何と書いてあったんですか？」

バーロー 「見たければ見てもかまわんよ。」「ポケットから電報を取り出して読む」「スグキテ。アナスタシアタイコウヒ。ペネロペ。」

ゴーライトリー 「でも、その三つの言葉からさっきの話を全部でっちあげたとおっしゃるんですか？」

バーロー 「ペネロペはわしにある程度の知性があるのを知つとつた。金を無駄に使いたくないから、必要なことだけ書いてあとはわしが推測するのに任せただ。」

ゴーライトリー夫人 「でも、わたしの電報にはアナスタシア大公妃のことは何も書いてなかったわ。」

バーロー 「ペネロペは何と言つとるのかね？」

ゴーライトリー夫人 「電報を取り出して」「スグキテ！ タイヘンナスキャンダル！ チュウオウアフリカデンドウダン。ペネロペ。」

バーロー 「でも、それは変だな。郵政公社はどれだけ馬鹿なんだ。間違えたに違いない。ポメラニアの王室が変わっているのは知つとるが、アナスタシア大公妃が中央アフリカの伝道師とのスキャンダルに巻き込まれるなんて想像できない。」

ビーズワース 「ちなみに、わたしの電報にはこれだけしか書いてありません。」「スグキテ。六シリング八ペンス（弁護士への普通の謝礼）。ペネロペ。」

バーロー 「六シリング八ペンスだと！ どうして六シリング八ペンスなんだ？」

ビーズワース 「分かりかねます。ですから、わたしはすぐに来たんです。」

ゴーライトリー 「目を輝かせて」「わたしの印象では、アナスタシア大公妃がドイツの奇跡的な治療の代金を払わずに伝道師と駆け落ちしてしまって、ペネロペは「ビーズワースに身振りで合図して」「法律の助けを借りて金を取り戻したいんでしょう。」

バーロー 「そんな馬鹿な！ 君は随分非現実的なんだな、チャールズ。」

ゴーライトリー夫人 「夫に向かって」でも、あなたも電報をもらったんでしょ、ねえ。

ゴーライトリー 「スグキテ。デシマル七〇三五。ペネロペ。」

バーロー 何て変なんだ。

ドアが静かに開いて、ペネロペがそっと入って来る。しばらくの間、ほかの者は気づかず、ペネロペは彼らを見てほほえみながら立っている。ゴーライトリーがペネロペを見つめる。全員が振り向く。

ゴーライトリー ペネロペ。

ほかの面々 ペネロペ。

ペネロペ 「前に出てゴーライトリー夫人にキスしながら」今晩は、ママ！

バーロー 「食い入るように」どうなってるんだ？

ペネロペ さあ、パパ。「ゴーライトリーにキスしてもらおうと顔を上向ける」

ゴーライトリー夫人 「心配そうに」さあ、ペネロペ。

ペネロペ あら、ビーズワースさん、来てくださってありがとうございます。「ビーズワースと握手する」キスしてちょうだい、ダベンポート伯父様。「何気なく顔を上向ける。バーローは少々いらつきながらキスする」

ペネロペ ありがとうございます……。ハイボールは大丈夫だったかしら？「周りを見ながら」ポートワインは？ お父様、大麦湯に手をつけてらっしゃらないわ。せっかく気を使ったのに！

ゴーライトリー夫人 「怒って」ねえ、お願いだから、説明してちょうだい。

バーロー 今までずっとどこに行ってたのかね？

ペネロペ わたしは——わたしは診察室に座っていました。「いたずらっぽく笑って」皆さんが入って来るのを見ていました。

ゴーライトリー夫人 「いささか気分を害して」ペイトンがお前は留守だって言ったわ。

バーロー 本当に、ペネロペ、お前の行動はけしからんと思うぞ。

ペネロペ あのね、皆さんが入って来るのに一人ずつ会っていたら、一騒動どころか四回も騒動を起こさなければならぬと思ったの。それじゃとても疲れるし効き目があるというのにはほど遠かったでしょうから。

ゴーライトリー お前は一騒動起こすつもりなのか？

ペネロペ 「これ以上ないくらい満足げに」今すぐひどい騒動を起こすつもりよ。

ゴーライトリー夫人 さあ、お前、話を先へ進める前に、お願いだから電報の意味を話してちょうだい。

ペネロペ それじゃ、いいこと、わたしは皆さんにすぐ来てもらいたくて、皆さんが一番興味を持っているものをすぐ目の前にちらつかせるのが一番いいと思ったの。

ゴーライトリー夫人 この子が言ってること分かる、チャールズ？

ペネロペ ねえ、お母様、世界中で一番簡単なことよ。お母様は異教徒たちを改宗させることに人生を費やしてこられたわ——遠くからね——わたしが中央アフリカ伝道団の名前を出せば、風の翼に乗ってここに飛んで来るだろうって分かってたわ。

ゴーライトリー夫人 実際はバスに乗って来たけど。でも、中央アフリカ伝道団に関係するスキヤンダルはないって言うの？

ペネロペ 「ほほえみながら」がっかりさせて、本当にごめんなさい、お母様。

ゴーライトリー で、一体全体どうしてわたしの電報には「デシマル七〇三五」と書いたのかね？

ペネロペ ああ、それはうちの電話番号で、「ジェラード」を「デシマル」に変えただけなの。

ゴーライトリー 妙に数字に見覚えがあると思った。

ペネロペ ほら、思った通りだわ。

バーロー 「くすくす笑いながら」電話番号を使ったのは名案だね。で、君には「六シリング八ペンス」という言葉を寄こしたんだ、ビーズワース、弁護士を呼べると分かってな。

ペネロペ 「ビーズワースに向かって」お怒りじゃないわよね？

ビーズワースはほほえみながら首を振る。

バーロー さあ、これでもうみんな片付いたんだから、アナスタシア大公妃のことを全部話しておくれ。

ペネロペ 「ぼかんとしてバーローを見ながら」アナスタシア大公妃ですって？ わたしがでつちあげただけだ。

バーロー どういうことだ、でつちあげたって？ わしはあの方のことをよく知っている、長年の知り合いだ。一族みんなと知り合いだ。

ペネロペ 「いささか戸惑うが、笑わないようにしながら」それは、ね——伯父様にも来てもらいたかったの。それで……。

バーロー 何を言っとるのかさっぱり分からん、ペネロペ。わしの一番親しい友人の名前を出しておいて、でつちあげたと言う。

ペネロペ 本当にごめんなさい。そんな人がいるなんて全然知らなくて、自分で考えてでつちあげただけ……。「くすつと笑って」伯父様がよくご存じの方を思いつくなんて、わたしって結構さえてたと思うわ。

バーロー 「大公妃」の名前を出さただけでわしがここに来るなどと、どうしてお前が思うのかわたしには分からん。

ペネロペ それはね、伯父様は頻繁にお出掛けになるから、それだけたくさんの方々と知り合いだと分かっているからよ。アナスタシア大公妃が本当にいるとすれば、伯父様はお知り合いだろうって確信してたけど、「手を振って」やっぱり、思った通りだわ。

バーローは怒るが口には出さず、答えない。

ゴーライトリー夫人 さあ、ペネロペ、本当の望みを話してちょうだい。

ペネロペ 「淡々と」ディッキーと離婚したいの。

ゴライトリー夫人 何ですって！
ゴライトリー かわいい我が子よ。
バーロー いやはや！

この三つのセリフは同時に発せられる。

ペネロペ 「悲しそうに」大騒ぎするつもりだったけど、もうお母様のおかげで一言で済んでしまったわ。

ゴライトリー夫人 でも、分らないわ。

ペネロペ もう一度言いましょうか？ デイッキーと離婚したいのよ。

ビーズワース 本気じゃありませんよね？

ペネロペ 「むっとして」もちろん、本気よ。あの人は二度と口を利かないつもりなの。そうなると、最初にあの人と一悶着あるでしょうね。わたしは誰かさんとも一悶着起こす覚悟はできているの。

ゴライトリー それで、デイッキーは今どこにいるのかね？

ペネロペ いつもの嘘を用意して家に帰って来る途中だわ。「突然声を詰まらせて」ああ、わたしがどんなにみじめか分かってさえもらえたら。

ゴライトリー夫人 ねえ、本当に本気なの？

ペネロペ 「絶望的に」ああ、みんなに分かってもらうにはどうすればいいの？

ゴライトリー 最初から全部、順序立てて話すのが一番いいだろうね。

バーロー 「勿体ぶって」なあ、チャールズ、これは君が役に立つような類の問題ではない。君は数学者で、現実的な問題について分かっているとは思えん。

ゴライトリー 「ちよっとだけ皮肉っぽく」こりや、大変失礼しましたね。

ゴライトリー夫人 「ペネロペに話すのを促して」それで？

ペネロペ ええ、何はさておき、わたしは実際デイッキーを溺愛しているの。今までほかの誰も愛したことはなかったし、これからもないわ。

ビーズワース 結婚生活四年にしては申し分のない供述です。

ペネロペ 五年三か月と二日よ。そして、日ごとにデイッキーへの愛が深まってきたわ。

ビーズワース これほど仲のよい夫婦にはお目にかかったことがありません。

ペネロペ わたしたちは一度も喧嘩したことがなかった。お互いに腹を立てたことすらなかったわ。絶対に終わりのこないハネムーンだったのよ。

ゴライトリー夫人 それで？

ペネロペ それが今、あの人がこの一月わたしに嘘をついていたことが分かったの。かなり遅い時間に帰って来ることが続いたから、どこに行ってたのか訊いたら、あの人が言うには、重病の患者を診なければならなかったんだけど——とても興味深い症例だったものだから——プレッシャーを感じて、神経を落ち着かせるためにクラブに行ってブリッジの三番勝負をせずにいられなかったんですって。で、その興味深い症例とブリッジの三番勝負とというのがエイダ・ファーガソンのことなのよ。

バーロー 「勿体ぶって」して、そのエイダ・ファアガソンとは何者なんだ？ 聞いたこともないぞ。

ペネロペ エイダ・ファアガソンはわたしの親友なの。嫌いだよ。彼女が性悪なのはずっと分かった。この四週間、ドイツキーは毎日午後の四時から七時まで彼女と一緒に過ごしていたのよ。

ゴーライトリー 「眉を吊り上げて」だけど、お前は亭主が帰って来た時、どこに行ってたの？ 必ず訊くのかい？

ペネロペ 「苛立って」ねえ、パパ、それが今度のことと何の関係があるの？ わたしたちみんなが知っているように、パパはいいお父さんで、世界一の数学者だけど、人生のことはちつとも分かってないわ。

ゴーライトリー またしても、失礼したみたいだね。

ゴーライトリー夫人 お父さんに紙を一枚と鉛筆を上げてちょうだい。そうすれば、わたしたちがこの件に片をつける間、算術をやって遊んでいるでしょうから。

ペネロペ 「ゴーライトリーに筆記用具を押しつけて」どうぞ、パパ。

ピーズワース でも、どうして分かったんですか？

ペネロペ 「苛立って」あら、どうして分かったかなんて、何の関係があるの？ 証

拠はすっかり揃っているのよ。

ゴーライトリー夫人 びっくりして倒れそうだよ。

ゴーライトリー 「ほほえみを浮かべて」お前ったら！

バーロー わしはちつとも驚かんぞ。

ペネロペ ダベンポート伯父様ったら！

バーロー ずっとそんな気がしていたんだ。思い出してくれ、イザベル、わしは最初からこの結婚に反対だったんだ。わしは言ったぞ、医者なんかと結婚するもんじゃないって。少しは角が取れてナイトに叙せられたような時、たまたに社交界で医者に会うことはあるが、医者の妻に会うことは絶対にない。医者だって結婚するだろうが、我々の知り合いとは結婚しない。古い考えかもしれないが、紳士として許される職業は法律、軍隊と教会の三つしかないというわしの持論を曲げる訳にはいかんのだ。

ペネロペ ねえ、ダベンポート伯父様、伯父様のお話はナンセンスだよ。

バーロー 「不機嫌に」意見を求められたから言ったまでだ。お前がナンセンスだと思うとは残念だ。

ピーズワース で、これからどうするつもりなんですか？

ペネロペ 「一大決心をして」もう二度とデッキと一緒に住むつもりはないの。あの人に会ったらすぐ、永久にこの家を出て行くわ。

ピーズワース 彼と少しは言葉を交わす気がありますよね？

ペネロペ 多少はね。あの人を軽蔑していることと嫌いだということを書いてやるつもりだし、そのあとはさっさと部屋を出て行くわ。

ピーズワース 彼を許さないって、本当に決めたんですか？

ペネロペ わたしがあの人のことをどう思っているかきちつと言ってやりたいということさえなければ、何があっても二度とあの人に話すことはないわ。

バーロー それに、家族のことも考えなければいかん。もちろん、お前はあいつのものを去らねばならん。いいかな、わしが言ってるのは、身分の低い人間と一緒にいては安心できないということだ。わしは今回のことはすべて不幸中の幸いだと思っとる。

ビーズワース あなたは法的な別居を求めて訴訟を起こしたいのですか？

ペネロペ ねえ、ビーズワースさん、何を言ってるの！ わたしはあの人と離婚するつもりなの。ひどいスキヤンダルを起こすつもりなの。

ビーズワース それなら、いざとなった時に新聞の助けを借りる手筈を整えておけるでしょう。彼に虐待されたことがありましたか？

ペネロペ まさか、ないわ！ そんなことされたら、怒るわ。この一月、あの人は今までにないほど魅力的で楽しませてくれた。ああ、エイダ・ファアガソンを確実に不愉快な目に遭わせてやるのができたらしいのに。煮え立っている油を注いでね。

ゴーライトリー夫人 ショックだわ、本当にショックよ。ドイツキーがそんなにひどい人だなんて、思いも寄らなかつたわ。

バーロー イギリスの家庭生活は破滅するぞ。かいつまんで言えばそういうことだ。

突然、ゴーライトリーが一生懸命書いているものがペネロペの目に留まる。ペネロペは驚いたようにその紙を見て、振り向く。

ペネロペ お母様、恐ろしいことが起こったわ。パパが突然たわ言を言う気違いになつてしまった。

ゴーライトリー夫人 ねえ、何を言っているの？

ペネロペ パパは紙を全部使って二足す二の計算を繰り返しているけど、どれも答えが五なのよ。

ゴーライトリー夫人 チャールズ！

ペネロペはバーローに紙を手渡す。

ペネロペ 見て。

バーロー 「二足す二は五。二足す二は五。」

バーローはビーズワースに紙を回す。

ビーズワース 「二足す二は五。二足す二は五。」

バーロー こうなるのは分かつてた。こうなるんじゃないかとずっと思つとつたんだ。

ゴーライトリー夫人 チャールズ、しっかりしてちょうだい。

ペネロペ パパ、二足す二が五だなんて、本気で思ってる訳じゃないわよね？

ゴーライトリー それどころか、二足す二は四だと確信しているよ。

ペネロペ それなら、一体どうして五になったの？

ゴーライトリー お前は自分がどうしてピアーズの石鹸を買うのか分かっているのか？

ペネロペ 働き過ぎだと思うわ、お父様。半時間ほど横になったらどうかしら？ デ

イツキーが来たなら、強壯剤をくれるから。

ゴーライトリー お前がピアーズの石鹸を買うのは、五万か所の広告版でこれほど肌

ペネロペ ちっとも面白くない、パパ、くだらないわ。

ゴーライトリー 一つのことをやみくもに言うだけでいいんだ。そうすれば、世間はみんなそれを信じる。そして、世間がそれを信じると、それが本当かどうかは非常に言いにくくなる。

ペネロペ それが二足す二とどういう関係があるの？

ゴーライトリー 「二足す二は五」だとやみくもに書けば、それが本当だと思うようになるかもしれないと思ったんだ。

ペネロペ でも、百万回書いたとしても、ちっとも本当にはならないでしょうね。

ゴーライトリー 残念ながら、それを結論とせざるを得ないね。

ペネロペ それで？

ゴーライトリー 人生はすべて、二と二を足して正しい答えを出すだけのことだ。

バーロー なあ、チャールズ。もし君が人生を論じるつもりなら、わしがいる必要はないと思うのだが。わしが二十年来言ってきたように、君は学者で社会とは縁のない人間だ。わしはこの社会で生きてきて、現実的な人間だ。ペネロペがわしに相談したいというのなら、待っているが。そうでないのなら……。

ペネロペ 黙ってて、ダベンポート伯父様。

バーロー 何てこった、ペネロペ。

ゴーライトリー この五年間、わたしはお前が二と二を足して七十九ほどにするのを見てきた。

ゴーライトリー夫人 何のことを言ってるのか分からないわ、チャールズ。ディッキーがやったことは言語道断で弁解の余地はないわ。単に一般的なモラルの問題よ。

ゴーライトリー ねえ、わたしに常識の話を見せてもらえるなら、君が一般的なモラルの話をしてても反対はしないがね。

ゴーライトリー夫人 ねえ、チャールズ、その二つは同じものよ。

ペネロペ お父様自身も若い頃は浮気なおやじだったと言えば、わたしがディッキーを許すようになるとお思いなら、今のうちにそんなのは通用しないと断っておいた方がいいわね。

ゴーライトリー夫人 何を言っているの、お前は？

ペネロペ それはね、わたし気づいたんだけど、夫が浮気をしていたことが妻に分かると、妻の身内の男たちはいつだって自分が妻に対してどれだけけしからぬ扱いをしてきたかを言って慰めようとするのよ。

ゴーライトリー ねえ、お前、わたしはそんなことを告白するつもりはないよ。告白なんかしない人間だからね。

ペネロペ もちろん、逆に、馬が引き革を蹴りのけて暴れ出すみたいにママが言うことを聞かなくなったら……。

ゴーライトリー夫人 お前、わたしがそんなアクロバットを演じるはずがないでしょ？

ペネロペ 続けて、パパ。

ゴーライトリー お前はディッキーを不名誉な方法で扱ってきたと思うんだ。

ペネロペ 「びっくりして」わたしがですって？

ゴーライトリー もしお前がディッキーに対して振る舞ったようにお母さんがわたしに振る舞っていたら、わたしはきっと飲酒癖がついていただろうね。

ペネロペ でも、わたしはずっと完璧に聞き分けのいい妻だったわ。あの人が歩く地面をひたすら崇拜してきたし。どんな男だってこれほど愛されたことがないくらい愛してきたのよ。

ゴーライトリー そういうのに耐えられる男はいないんだ。

ペネロペ パパ、どういふことなの？

ゴーライトリー なあ、お前は朝、昼、晩と彼を愛してきた。彼が話しをする時に愛し、黙っている時に愛してきた。歩く彼を愛し、食事する彼を愛し、眠っている彼を愛してきた。彼はずっとお前の愛から逃れることができないでいたんだ。

ペネロペ でも、それよりほかに仕方がなかったんですもの。

ゴーライトリー そこまで見せる必要はなかったんだ。

ペネロペ だからあの人がエイダ・ファーガソンと遊ぶのももったっておっしゃるの？

ゴーライトリー 彼の弁解にはなる。

ペネロペ 何てひどいの、男って！

ゴーライトリー 違うんだ。でも、お前には奇妙に思えるかもしれないが、男だって人間なんだ。お前だって子供の時はイチゴのアイスに目がなかった。

ペネロペ 今でも大好きよ。

ゴーライトリー 毎日、朝、昼、晩と一月でもイチゴのアイスが食べたいかね？

ペネロペ そんな、考えただけでも恐ろしいわ。

ゴーライトリー 気の毒に、ディッキーは五年間イチゴのアイスを食べてきた。それしか生命を維持する方法がなかったからね。

ペネロペ 「びっくりして」まあ！

ゴーライトリー お前は、彼が出掛ける時は必ず玄関に出て帽子をかぶらせ、行ってらっしゃいのキスをしないではおかなかった。彼が帰って来た時は必ず階段を駆け下りてコートを脱ぐのを手伝い、お帰りなさいのキスをしないで

はおかなかった。朝食のあとで、彼が新聞を読んだり一服するために座っている時、お前が彼の椅子の肘掛けに座って彼の首に腕をからませているのをわたしは見たことがある。

バーロー 「憤慨して」ペネロペ!

ペネロペ そんなにひどいことなの?

バーロー やれやれ!

ペネロペ 「ビーズワースに向かって」あなたが一服している時、ビーズワース夫人

がああなたの椅子の肘掛けに座ったことはありませんか?

ビーズワース 正直に言うと、妻がそういう時間を家事に精を出すことに費やしてく

れたので感謝しているとわがざるを得ませんね。

ペネロペ ひどいおやじたちね。わたしの気持ちを察してもらうためにここに来ても

らったのに、完全にわたしを苦しめるんですもの。

バーロー ペネロペや、限度というものがあるんだ。

ペネロペ そんなの、知ったこっちゃないわ。あの人と離婚するつもりなんだから。

ゴーライトリー もうちょっとだけ付け加えてもいいかな? ひよつとすると、二足

す二がまた四になるかもしれないから。

ペネロペ 数学者の娘だというのはとても気に入っていることだけど、それも分から

なくなってきたわ。

ゴーライトリー 夫と離婚するよりも、夫の愛情を取り戻す方がいいと思わないか?

ペネロペ 愛情なんか欲しくないわ。

ゴーライトリー 「ほほえみながら」取り戻すことができるとしてもそのつもりはな

いというのは確かかね?

ペネロペは一瞬父親を見てから、すつと近寄る。

ペネロペ 「涙声で」パパ、あの人を愛を取り戻せると思う? わたしが愛を失った

のはわたしのせいだっておっしゃったわ。ああ、あの人なしではどうした

らいいか分からない。知ってからすぐくみじめだったわ。わたしは陽気に

装おうとしてきたけど、心の中でどう感じているか分かっていただけいたら

……。ああ、ひどい人たち、どうして隠しておいてくれなかったのかしら?

バーロー なあ、ペネロペ、元気を出すんだ。あいつはいい家柄の出じやない。厄介

払いができてよかったと思うのだが。

ペネロペ ダベンポート伯父様、伯父様があの人のことを悪く言ったら、わたしはす

ぐにヒステリーの発作を起こすわよ。

バーロー お前が父親から何を言ってもらえると期待しているのか、わたしには想像も

つかん。

ゴーライトリー 「ほほえみながら」赤ん坊や乳飲み子の口からだってしばしば賢明

な言葉が出るものだと言うじやないですか、ダベンポート……。

バーロー 君はそのどちらとも言えないと思うのだが。しかし、どちらにしても、わ

しはこれ以上いる訳にはいかんのだ。

ペネロペ あら、駄目、まだ行かないで、ダベンポート伯父様。

バーロー わしのアドバイスは必要なさそうだし、夕食前にホリントン夫人を訪ねる約束なんだ。

ペネロペ 行けなくなっただって、その方に電話してください。わたしの居間に電話がありませんから。

バーロー 「肩をすくめながら」わしも甘すぎるな。わしを適切に評価する人間はおらん。

バーローは出て行く。

ペネロペ パパ、わたしのためにディッキーを戻って来させるって言ってちょうだい。

あの人が必要なの。あの人が必要なのよ。

ゴーライトリー お前、実に簡単なことだ。ただ必要なのは、かなりの気転とかなりの勇氣とかなりの自制心なんだよ。

ペネロペ 「皮肉っぽく」ほかにはないの？

ゴーライトリー たくさんある。常に自分の気持ちを抑えていなければいけない。警戒しなければならぬのは、自分の口と目とほほえみと——かんしゃくだ。

ペネロペ 実に簡単なことだとおっしゃったと思うけど。

ゴーライトリー エイダ・ファアガソンはきれいなのかい？

ペネロペ いいえ、ひどいブス。

ゴーライトリー そうなのか？ となると、思っていたより深刻になるな。

ペネロペ どうして？

ゴーライトリー 男が美人と恋に落ちたのなら、冷めるものだ。だが、ブスと恋に落ちたのなら、一生淫恋しているだろうな。

ペネロペ 安心したわ。エイダ・ファアガソンはとっても魅力的ですもの。

ゴーライトリー それなら、彼を取り戻せるだろう。

ペネロペ どうすればいいのか、きちっと教えてちょうだい。その通りやるから。

ゴーライトリー 彼のやりたいようにやらせるんだ。

ペネロペ それだけ？

ゴーライトリー やりたいようにやらせるということには、たくさんの意味があるんだ。彼が帰って来たら、大騒ぎしないで、彼に喜ばれるようにしなさい。

こういう時は特に、どこへ行っていたか聞くのはよすんだ。彼がお前を置いて出掛ける時は、どこへ行くのかとか何時に帰るのかとか訊くのはやめなさい。何かあったとお前が疑っていることをちよつとでも彼に悟らせさせちゃいけない。反対に、あらゆる機会を捉えて彼がエイダ・ファアガソンとの付き合えるようにするんだ。

ゴーライトリー夫人 チャールズ、あなたはペネロペに不倫を見て見ぬふりをするように言っているのよ。

ゴーライトリー 支障が全部なくなったら、ディッキーは密会の面白みが半減したことに気がつくだろう。もう、半分勝ったようなものだ。あとは時間とエイ

ダ・ファーガソンに任せておけばいい。彼が新聞を読みたい時は、エイダ・ファーガソンを肘掛けに座らせなさい。彼に全ての行動の理由をエイダ・ファーガソンに説明させなさい。そういう状況になると、女は始終気が気じゃなくなって、その結果、常にしつこく要求するようになるものだ。会話に間が空くと必ず、エイダ・ファーガソンが「以前と変わらなずわたしのこと好き？」って言うだろう。その言葉が愛の喉を絞めつけるんだ。彼が帰ろうとすると必ず、エイダ・ファーガソンが「あと五分いてちょうだい」と懇願するだろう。男が意志に反して留まるこの五分間というのが愛の寿命を縮めるのだ。彼が出て行く度に、エイダ・ファーガソンが「何時に帰るの？」って言うだろう。この質問がシャベルですぐわかれて愛の墓に入れられる土なんだ。

この間ずっと、ペネロペはびっくりしてゴーライトリーを見つめ続ける。

ペネロペ そんなこと、どこで習ったの、お父様？

ゴーライトリー 「大したことではないと言わんばかりに肩をすくめて」こんなのはせいぜい二と二を足すような問題にすぎないよ、お前。

ペネロペ 考えてもいなかったわ、数学がそんなに面白いとも——不道德だとも。

ゴーライトリー お前はどう思うのかね？

ペネロペ でも、ディッキーがエイダ・ファーガソンを振ったとしても、またわたしと恋に落ちる理由がないわ。

ゴーライトリー お前がそうさせなければ。

ペネロペ どうすればいいか分かるといひんだけど。

ゴーライトリー 必要なのは、あと少しの気転とあと少しの勇氣とあと少しの自制心だけなんだよ。

ペネロペ でも、わたしがそんなにたくさん長所を身につけたら、女じゃなくて化物だわ。そうなったら、どうして愛してもらえるの？

ビーズワース 「窓のところから」玄関に車が止まっています。

ペネロペ ほら……。鍵が回されるのが聞こえるわ。ディッキーに違いない。

ビーズワース どうするつもりですか？

ペネロペ 「ちゅうちよしながら」どう思う、ママ？

ゴーライトリー夫人 お前、わたしはお父様の考えに全く不賛成だし、どうしてそんな考えが頭に浮かんだのか想像できないけど、分別があると言わざるを得ないわ。

ペネロペ 「決心しながら」やってみるわ。忘れないで、何が起きたか誰も知らないんですからね。応援してくださいさるわよね、ママ？

ゴーライトリー夫人 わたしに嘘八百を並べろって言うつもりなの、お前？

ペネロペ 罪のない嘘をつくだだけよ、お母様。大嘘をつかなければいけない時は、わたしがつきますから。

ビーズワース　でも、バーローはどうなるんですか？
ゴライトリー　あの人は俗物だ。きつと、へまなことを言っつてぶち壊してしまう。
ペネロペ　わたしが黙らせるわ。

バーローが入って来る。

ペネロペ　あら！

バーロー　電話が通じなかった。あいつら交換手はどうなつとるのか分からん。あばずれどもが！

ペネロペ　ダベンポート伯父様、ディッキーのことは全くの間違いだったって分かったの。責めなきやいけないことはないのよ。

バーロー　驚いたね！　で、エイダ・ファアガソンは？
ペネロペ　別に悪くないのよ。間違いないわ。

バーロー　それは驚きだ。一体どうしてそういうことになったんだ？
ペネロペ　二と二を足したのよ。

バーロー　やれやれ！　訳もなく大事な約束を破らなければならなかったというのは全くもつて不愉快だ。思いつくべきだった……。

ペネロペ　「遮りながら」ダベンポート伯父様、わたしが一騒動起こす機会を与えられないのは実にまずいけど、伯父様が一騒動起こすおつもりでしたら、わたしは耐えられないわ。

ビーズワース　さてと、わたしはもうこれ以上お役に立てないので、家族の許へ帰るとしますか。

ペネロペ　よろしいけど、今回は仕事で来ていただいたと思っています。

ビーズワース　いえ、そんな馬鹿な！

ペネロペ　お仕事をしていただいて何もお支払いしないなんて、夢にも思っていますせんもの。本当においくらか教えていただかなくては。

ビーズワース　本当にどう言ったらいいのかわかりません。

ペネロペ　ディッキーがどなたかを診察に行った時は、一ギニー請求しますわ。

ビーズワース　電報では六シリング八ペンスとだけおっしゃっていましたわ。

ペネロペ　分かりました。それだけお支払いします。その方がすつきりするわ。
ビーズワース　現金で払ってくださいさるつもりじゃないですよね？

ペネロペ　最初はお支払いしようとは思っていませんでした。でも、今はお支払いしたいと思うの。だって、その方が負い目を感じなくて済みますからね。

ビーズワース　それなら、お任せします。さようなら。
ペネロペ　さようなら。

バーロー　さようなら、ビーズワース。近いうちに一緒に夕食を食べにクラブに来たまえ。

ビーズワース　喜んで。さようなら。

出て行く。

バーロー 実にいい奴だな。全くの紳士だよ。あいつのことを事務弁護士だなんて思う人間はいないだろうな。重要でない人間一人か二人と一緒にあいつを夕食に誘おう。

ペネロペ デイツキーだわ。口笛を吹いているのが聞こえるでしょ？ どうやら、最高にご機嫌みたいね。

デイツキーが入ってくる。デイツキーはハンサムで身だしなみのいい三十五歳の知的職業人である。陽気な性格で非常に上機嫌である。うろたえるようなことはめつたにない。ペネロペが夢中になるのも分かるような魅力的な態度である。

デイツキー やあ、どうかしちやったのかと思ったよ、ペン。

ペネロペ どうして？

デイツキー いつもは僕が帰ると下りて来て迎えてくれるのに。

ペネロペははっとして笑いを隠す。

ペネロペ 聖人の母が来てるの。

デイツキー 「陽気に」そんなのは愛情深い夫をないがしろにする理由にはならないね。「ゴーストライトリー夫人と握手しながら」聖人のお母様はご機嫌いかがですか？ やあ、ダベンポート伯父さん、今日の公爵夫人方はどうですか？

バーロー 何だって。何を言っとるのか分かんが。

デイツキー 「部屋のあちこちに置かれているデカンターとグラスを見回しながら」おや、随分贅沢にやっていたんですね？ 誰がポートワインを飲んでいたんですか？

ペネロペ 誰も飲んでいなかったわ。それは空のグラスよ。

デイツキー こんなふうには神の摂理は僕に働くんぞ。わざと僕を誘惑するようにね。それは毒薬というしかない。何しろうちは痛風一家だからね。僕の先祖はコルヒチン製剤で百年生きてきたんだ。僕はポートワインのボトルを見ただけでつま先に刺すような痛みを感じるよ。それでも、僕は飲むけどね。

デイツキーは自分でグラスを満たすと、ちびりちびり飲んで大いに満足する。

バーロー 痛風が家柄のいい印だと考えるのは、もちろん、大きな間違いだ。わしのクラブのボーイは長いこと痛風に苦しんでおる。

デイツキー ひよっとすると、そいつは伯爵の私生児かもしれませんよ。左の肩に赤いあざがあるかどうか訊いてみるべきです。どうかしたのかい、ペン？

ペネロペ 「びっくりして」わたしが？

ディッキー ちよつと具合が悪そうに思えたからね。

ペネロペ どうしてかしら？

ディッキー 分からないけど。必ずしも本調子じゃないよね？ 僕が今日何をしてい
たか訊かなかった。いつもなら、僕の行動に興味を持っていてるのに。

ペネロペ 「父親をちらつと見て」言いたければ言うだろうと思つたの。

ディッキー おや、それはちよつとひどいと思うな。僕が精根尽きるまであくせく働
きに出掛けているのは、君に車や素敵なフロックなんかを供給するためだ
というのに、僕がすることにちつとも関心がないなんて。

ペネロペ 「ほほえみながら」じゃあ、今日の午後は何をしていたの？

ディッキー 「ほつとため息をついて」ああ、実に変な一日だった。非常に興味深
い症例が今進行中でね。かなり時間がとられている。もちろん、結構気を
もんでいるけど、あと一日ですべてがはつきりしそうだ。それで、僕はあ
そこで一時間近く過ごしたんだ。

ペネロペ 一時間ですって？

ディッキー ああ、何しろ診察をしたからね。

ペネロペ でも、昨日も診察したわ。

ディッキー 昨日だって？ ああ、小うるさいばあさんでね。いつも診察を望むんだ。

ペネロペ それは素敵じゃない？

ディッキー そうは思わないね。僕を信用していないみたいだ。

ペネロペ その代わり、二倍請求できるわよね？

ディッキー ああ、もちろん、そういう利点はある。

ペネロペ ずつとアーミン毛皮のストールが欲しかったの。今度こそ買うわ。

ディッキー 「沈んだ顔で」ああ、でも、まだ払ってもらっていないんだ。

ペネロペ 支払いなら喜んで待ってくれるわ。今ならとつても安く買えるんだから。

ディッキー 「話題を変えるために」それでね、診察のあとは疲れていたものだから、
クラブに行つてブリッジの三番勝負でもしない訳にいかかつたんだ。

ゴーライトリー ところで、患者の名前は何というのかね？

ディッキー 患者の名前ですか？

ペネロペ ええ、そうだわ、大金をもたらす新しい患者ができたつて、パパに話して
いたところなの。名前が思い出せなくて。

ディッキー 「どきまぎして」ああ——ええと、マック……夫人だよ。

ペネロペ マック何夫人ですって？

ディッキー マックナツシング夫人だよ。

バーロー 何を言つとるんだ、マックナツシング夫人だと？ マックナツシング家な
どというのは聞いたこともないぞ。

ディッキー ええ、もちろん、患者の名前はマックナツシングではありません。

バーロー だが、君は間違いなくマックナツシング夫人だと言つたぞ。

ディッキー ねえ、ペン、僕はマックナツシングのことなんか言つたかな？

ペネロペ それなら、患者の名前は何ていうの？

ディッキー この十分間、僕は言い続けてきた。患者の名前はマック夫人だって。
バーロー 一体どうしてすぐにそう言わんのだ？

ゴーライトリー そんなもうかる患者をどうやって見つけたんだ？

ディッキー それは、非常に運がよかったです。その患者は君のあのかわいらしい
友達から僕のことを聞いたんだよ、ペン。何という名前だっけ？

ゴーライトリー 君は名前の覚えが非常に悪いみたいだな、ディッキー。次の日にや
るべきことを忘れないように、前の晩にハンカチに結び目を作るべきだな。

ディッキー ペンの友達なんです。「思い出すふりをしながら」、「亭主は海軍にいて、
マルタに駐在しているんだよね？

ペネロペ エイダ・ファーガソンね。

ディッキー そうだ、それだ。ファーガソン夫人だ。

バーロー キンガースのファーガソン家の人だろうね。

ディッキー 全く分かりません。実にかわいらしい人だと思いました。でも、実を言
うと、僕は大きくて興味がなかったんです。

ペイトンが入って来てファーガソン夫人の来訪を告げる。ファーガ
ソン夫人は美しい見栄えのする三十歳くらいの女である。

ペイトン ファーガソン夫人です。

ディッキーは驚きでいっぱいになる。ペイトンは出て行く。ほんの
一瞬困惑があるが、ペネロペはすぐに気を取り直して感情あふれる
ばかりに客に近寄って行く。

ペネロペ ご機嫌いかが？

ファーガソン夫人 まずい時に伺ったかしら？

ペネロペ もちろん、そんなことないわ。いっだって、お会いできるのは嬉しいです
もの。

ファーガソン夫人 午後はずっと買い物をしていて、そう言えば随分あなたと会って
ないわって、突然思ったものだから。

ペネロペ わたしの聖人の母をご存じかしら？

ファーガソン夫人 初めまして。

ペネロペ こちらがわたしの父上で、こちらは伯父なの。

バーロー 初めまして。

バーローは明らかにファーガソン夫人に圧倒されている。

ファーガソン夫人 「平然とディッキーの方を向きながら」わたしのこと、お忘れか
しら？

ディッキー もちろん、そんなことありません。

ファーガソン夫人 随分お久しぶりよね？

ディッキー 本当ですね。

ファーガソン夫人 先日ピカデリーですれ違ったのに、そしらぬ顔でしたわ。

ディッキー 申し訳ない、近眼なもので。

ペネロペ ディッキーったら、あなたはちっとも近眼なんかじゃないわ。どうしてそんな嘘がつけるの？

バーロー 「勿体ぶつて慇懃に」男にとって、美しい女性が見えなかったことを許してもらうには、肉体的な障害のせいにするしかない、とディッキーは思っているのだよ。

ファーガソン夫人 まあ、そんなふうに言うてくださるなんて、何てご親切なの。

バーロー どういたしまして、どういたしまして。

ペネロペ ディッキーに素晴らしい患者さんを紹介してくれて、お礼を言わなきゃ。

ディッキー 「慌てて、ファーガソン夫人がびっくりしている様子を見ながら」ちよ
うど、マック夫人のことを妻に話していたところなんです。

ファーガソン夫人 「さっぱり分からずに」あら、そう。

ディッキー あの人が僕を呼ぶように言うてくださって、本当にありがたかった。今日
の午後、往診に行っていたんです。

ファーガソン夫人 「事情が呑み込めて」あら、そう、人様のためにはできるだけの
ことをしたいもの。素敵な患者でしょ。

ペネロペ 往診が何度も必要みたい。

ファーガソン夫人 そうなの、彼女ったら、先日もオフアレル先生のことかどんなに
好きかって言うだけで。重病なんじゃないかと思って、かわいそうに。

ディッキー 実を言うと、とっても心配なんです。

ファーガソン夫人 オファレル先生が診ているって知れば、友達みんなも大いに安心
だわ。

バーロー その人はスタッフフォードシャーのマック家の人なのか、あるいはサマセツ
トシャーのマック家の人なのかと思っておったのだが。

ディッキー 全く分かりません。

バーロー 全く分からないとは、どういうことだ？ どちらかに違いないんだぞ。

ディッキー どっちだって、構わないと思いますが。

ペネロペ その人はどんな人なの？

ディッキー ううん、分からないな。ほかの人と同じだと思うよ。

ペネロペ 馬鹿なこと言わないで、ディッキー。太ってるか痩せてるかくらい分かる
はずよ。

ディッキー 「ファーガソン夫人を見ながら」まあ、太ってますよね？

ファーガソン夫人 デブだわね。

ペネロペ そうなの？

ディッキー 白髪でね。

ファーガソン夫人 全部をちよつとずつぐるぐる巻きにしてね。

ディッキー 「笑いながら」そう。どうやってやるのかね。

ファーガソン夫人 とてもきれいな青い目をしているわよね？
ディッキー そう、とてもきれいな青い目だ。

ペネロペ 下の名前は何て言うの？

ディッキー ええと——全く分からないな。

ファーガソン夫人 「即座に」キャサリンよ。

ペネロペ キャサリン・マックですって？ お母様、お母様の昔からの友達のキャサ

リン・マックだわ。すごい偶然だわ！

ゴーライトリー キャサリン・マックか。何だ、もちろん、はっきり覚えている。ちよつとずつ白髪をぐるぐる巻きにして、とてもきれいな青い目の。

ペネロペ その人はママに会いに来てもらいたがってないの？

ディッキー とてもじゃないけど、まだ誰とも会えないんじゃないかな。

ゴーライトリー そんなに悪いって聞いて、わたしたちがどれだけ気の毒に思っているか伝えてもらわなければ。

ディッキー ええ、はい、何でも伝えますよ。

ゴーライトリー夫人 「いささかきこちなく、立ち上がりながら」行かなければなら

ないわ。あなたもいらつしやる、チャールズ？

ゴーライトリー ああ、お前。

ペネロペ さようなら、お母様。

ゴーライトリー夫人が外套を着るのを手伝ってもらっている時に、みんなは離れて話す。ディッキーはほとんどファーガソン夫人と二人だけにされる。

ディッキー 「小声で」ねえ、今頃何しに来たの？

ファーガソン夫人 明日はいつ会えるか言ってくださらなかったから。

ディッキー ええっ、電話してくればよかったのに。

ファーガソン夫人 あら、電話なんて信用できないわ。

ディッキー 電話が信用できないって、どういう意味？ いったって君は……。

ファーガソン夫人 ディッキーったら！

ディッキー ごめん。そういうつもりじゃ。

ファーガソン夫人 一体どうしてあんなマック夫人の作り話なんかでつちあげたの？

ディッキー 僕がでつちあげた訳じゃない。作り話が作り話をでつちあげたんだ。僕が自分の行動の理由を説明しなければならなくてね。

ファーガソン夫人 あなたがどこに行っていたか、どこへ行くつもりかって、奥さんが訊くとも言うの？ なんて女らしいこと。「無邪気に」ところで、今夜はどうするつもりなの？

ディッキー 「面白がって」ああ、ペネロペと「カールトン」のグリルで夕食を食べべ
て、ミュージックホールに行くんだ。

バーローが近寄って来る。

バーロー さようなら、ファーガソン夫人。

ファーガソン夫人 「感情あふれんばかりに」さようなら。

バーロー 「ファーガソン夫人と握手しながら、ペネロペに向かって」すごく素敵な女性だ。

ペネロペ 「怒ったふりをしながら」ダベンポート伯父様ったら！

バーロー さようなら、かわいい子。正真正銘のレディーだ。

ペネロペ さようなら。

バーローとゴーライトリー夫人は出て行く。

ゴーライトリー 「ついて行きながら」大丈夫かい？

ペネロペ ええ、任せといて。自信がついてきたわ。

ゴーライトリー 「にこにこして」気がついてたよ。

ゴーライトリーは出て行く。

ファーガソン夫人 伯父様って素敵な方ね、ペネロペ。とても品があつて。

ペネロペ あなたは伯父様の心をつかんでしまったわ。あなたはすごく素敵な女性だつて、わたしに言ったもの。

ファーガソン夫人 まさか？ 殿方はわたしが女らしい女だつてよく言うわ。

ペネロペ 多分、それは同じことを言ってるのよ。

ファーガソン夫人 でも、実はわたし、急がなきゃならないの。本当にこんなに遅い時間だとは思っていなかったものだから。

ペネロペ 今夜は何か予定があるの？

ファーガソン夫人 あら、ないわよ！ わたしはとてもおとなしく暮らしているの。

夜ずっと独りで本を読むことほど楽しいものはないわ。

ペネロペ あなたは昔、出掛けるのが好きだったわ。

ファーガソン夫人 夫はわたしが家にいる方が好きだつて、分かるの。それに、あの人が外地で勇敢にお国のために尽くしているかと思うと、楽しもうなんていう気持ちになれないわ。

ペネロペ 何て素敵な性格をお持ちだこと。

ファーガソン夫人 「ディッキーに向かつて」私の夫は軍艦に乗っていますの。マルタに駐在してしまってますね。でも、申し訳ないことに、わたしは健康のためにイギリスに留まっていなければなりませんの。

ペネロペ 大事なお願いがあるんだけど、やっていただけるかしら。

ファーガソン夫人 あなた、わたしは旧友のためならいっだって何でもするわ。

ペネロペ 実は、午後ずっとどうしようもなくひどい頭痛がしてたの。

ディッキー 「やっぱりねと得意気に」帰って来たたとんに、どこか悪いんだと分かったよ。

ペネロペ 今夜のミュージックホールの正面席を二席持っているの。わたしの代わりにあなたがディッキーと一緒に行ってくれるとすごくありがたいんだけど。

ディッキーとファーガソン夫人の間に目くばせが交わされる。

ファーガソン夫人 わたしがですって？

ペネロペ ディッキーは独りで出掛けるのが嫌いなんだけど、わたしはとても動けないから。レストランと一緒に楽しく夕食を食べてから観に行けばいいわ。

ディッキー 本日に君は行けないのかい、ペン？

ペネロペ 全くお話にならないもの。

ファーガソン夫人 オファレル先生にいらって世話してもらわなきゃって思わないの？

ペネロペ あら、そんなこと！ 彼は出掛けるのがいいのよ。身を粉にして働いたんですもの。今日の午後は一時間近くかかる診察があったのよ。

ファーガソン夫人 「ディッキーに向かつて」わたしが一緒するのをお望みかしら？

ディッキー そうしていただけると。退屈でなければ。

ファーガソン夫人 それなら、喜んで。

ペネロペ どうもありがとう。でも、もう遅いわ。すぐに掛けないと。

ディッキー 本日に君を置いて行ってもいいのかい、ペネロペ？

ペネロペ 全然構わないわ。

ディッキー じゃあ、ちょっと待って、何か薬を用意するよ。

ペネロペ 「あわてて」あら、いいのよ、薬がなくてもよくなりそうだから。

ディッキー 馬鹿な。もちろん、何か上げなければ。

ディッキーは出て行く。

ファーガソン夫人 こういうのが家族にお医者様がいるいいところね。

ペネロペ 「不機嫌に」ええ、すごくいいところだわ。

ファーガソン夫人 夫がいつも手近にいて、羨ましいわ。自分の夫が勇敢にお国のために尽くしているかと思うと——何しろ、わたしがかるお医者様はみんな、わたしが夫のところに行くのは最も危険だって言うのよね。

ディッキーがミルク状の液体がいっぱい入っている小さな薬のグラスを持って入って来る。

ディッキー はい、どうぞ。

ペネロペ あら、いいのよ、ディッキー、あまり飲みたくないの。

ディッキー 馬鹿なこと言うもんじゃないよ、君。これでどんどんよくなるから。

ファーガソン夫人 横になってなきやいけないのは確かだわ。

ペネロペ いいえ、よければ、起きていたい。
ディッキー 何て聞き分けがないんだ、君は！ すぐこのソファーに横になるんだ。
ペネロペ いいわ、どうしても言うんなら。

ペネロペはソファーに横になる。

ファーガソン夫人 行く前に、あなたを楽にさせなきや。

ディッキー クッションを全部背中に置こう。それがいいよね？

ペネロペ ええ、ありがとう。

ディッキー かわいそうに。

ファーガソン夫人 きつと、足に何か掛けなきやいけないわ。

ディッキー このひざ掛けを足に掛けよう。ほうら。すぐこの薬を飲んで……。ほうら……。

ペネロペ あら、いいのよ、ディッキー。あなたたちが行ってから飲むわ。本当に飲むから。飲むって約束するわ。

ディッキー 一体どうしてすぐ飲めないの？

ペネロペ それは、あなたの前でしかめっ面をしたくないからよ。

ディッキー でも、君がしかめっ面をするのを僕は何度も見ているよ。

ペネロペ ええ、あなたにしかめっ面をしたわ。あれは全然違うことなの。

ディッキー さあ、いい子にして飲みなさい。

ペネロペ あなたたちが行ってからね。

ファーガソン夫人 「大いなる決意で」あなたがそれを飲んでしまうまで、わたしはこの部屋から動くつもりはないわ。

ペネロペ 「観念して」それをちようだい。鼻をつまんで、ディッキー。「薬を飲み込んで、しかめっ面をする」ああ、あなたなんかと結婚するんじゃないわ。たわ、ディッキー。

ディッキー これで元気になるよ。

ペネロペ 元気になんかなりたくないわ。

ファーガソン夫人 さようなら。気分が悪くてお気の毒だわ。

ディッキー 行ってくるよ、君、

ペネロペ 二人で素敵な時間を過ごせるよう祈っているわ。

ディッキーとファーガソン夫人は出て行く。ペネロペは跳び起きると怒ってクッションを脇へ投げ、二人を呼び戻そうとするかのよう
にドアに向かって素早く一、二歩進んでから立ち止まる。

ペネロペ 駄目、呼び戻しちや。呼び戻すもんですか。

ペネロペはゆっくり戻ってから、ソファーに沈み込んでわっと泣き出す。

第一幕
終わり

第二幕

オフアレル医師の診察室。家具が居心地良く備え付けられている部屋で、壁には銅版画が数枚掛かっており、暖炉の上には銀のフレームに入った写真数枚と花が置いてある。片側に大きなデスクがあり、書類、本と読書灯が載っている。ディッキーが座る回転椅子があり、デスクをはさんで患者用の椅子がある。脇机には、顕微鏡、試験管用のスタンド、薬瓶が一つ二つ、化学薬品の入った大きな瓶の列と電気スタンドが載っている。患者が横になるための肘掛けのないソファがあり、側に椅子が二、三脚置いてある。棚の上には医学の本がある。小さなテーブルの上には『ランセット』（医学専門誌）が山になっている。

ディッキーが聴診器を耳に入れたままデスクに座っている。患者はズボン吊りのボタンを留めながら立ち上がったままにいる。患者は会話を続けながら、ベストとジャケットを着る。患者は禿げ頭で金縁メガネをかけた非常に気に小さい小男である。ひどく緊張して申し訳なさそうな様子である。

ディッキー 処方箋を書きましようか。

患者 はい、ありがとうございます。えらくお手数をおかけしました。

ディッキー どういたしまして。さてと、何を差し上げたらよろしいですか？

患者 「ひどくどぎまぎして」何でも先生のお好きなものを、どうぞ。ありがとうございます。うございます。

ディッキー いいですか、あなたのは大したことありませんよ。

患者 ああ、とても残念です。わたしは本当に、本当に……。

ディッキー わたしはあなたがむしろ喜ぶだろうと思っていたんですが。

患者 「すまなそうに」はい、もちろん、とても喜んでおります。そんなつもりじゃなかったんですが。たくさんお時間を取らせてしまつて。

ディッキー わたしはどこも悪くない人からしか生活費を稼げないんですよ。病氣の人はよくなるか死ぬかで、それでおしまいなんですからね。

患者 はい、分かります。そんなことは考えてもみませんでした。いいお天気です。すね？

ディッキー お座りになりませんか？

患者 はい、ありがとうございます。どうも、どうも。たくさんお時間を取らせてまして。

ディッキー わたしが患者さんにデスクをはさんで座っていたくのは、突然ある患者さんにわたしに蛇がついているのが見えて、わたしがかまれそうになっているのを助けるためにわたしの喉をめがけて跳びかかってきて以来な

んですよ。その患者さんは診察の途中でわたしの喉を絞めそうになって、わたしが患者さんの胸を膝で押さえつけると、わたしのことを恩知らずな悪魔だ、また蛇が襲ってきてもほっとくぞと言ったんです。

患者 「非常に動揺して」そうですか、でも、わたしが先生の喉をめがけて跳びかかる心配はありませんよね？

デイツキー ええ、もちろんありませんよ。

患者 わたしは昼食には何も飲みませんし、夕食にはクラレットと水しか飲みません。

デイツキー 何の薬も差し上げないとお金を払う価値がないとお考えなんですよ？

患者 いや、それではお気の毒です。でも、妻のために、何かいただけたらと思うのですが。

デイツキー じゃあ、いいですか、あなたが元気が出るようにストリキニーネを、安心するためにビスマスを出しておきました。毎日三回、食後に飲んでください。

患者 おお、どうもありがとうございます。それがちょうどいいと思います。それでは——えーと。それでは——えーと……。

患者はまごまごしながら立ち上がる。

デイツキー これ以上あなたにしてあげられることはないと思います。

患者 はい、えーと——どうもありがとうございます。わたしは——えーと——随分お手数をお掛けしてしまって、ありがとうございます。はい、えーと……。

デイツキー 「察して」ああ……。診察代は二ギニーです。

患者 「すっかり安心して」ああ、どうもありがとうございます。ちょうどそれをお訊きしたかったです。小切手でよろしいですか？

デイツキー うちではいつも現金でいただくことにしています。何しろ偽の小切手だといけませんからね。

患者 ああ、承知しました。どうもありがとうございます。現金がお好きでないかもしれないと思ったものですから。

デイツキー 医者にお金を払うことに世間の人たちがどれだけ気を遣うかということについては尋常でないものがありますね。医者はお金をもらうのがどれだけ嬉しいか分かってさえいただければ。

患者 はい、どうもありがとうございます。

患者はポケットから二ギニー（二ポンド二シリング）を取り出すと、恐る恐る暖炉の上の棚に置く。

デイツキー 違いますよ、あなた、暖炉の上じゃない。やって良い事と悪い事がある。

患者 おっと、失礼しました。ごめんなさい。

ディッキー　うちではいつもデスクの上に置いてもらっているんです。

患者　お医者様に診察を受けに行くことがめったにありませんので。

ディッキー　そのようですね。もしそうでなかったら、多分あなたは二ポンド払って、

あとの二シリングは持ち合わせがないって言うでしょう。特に、女性の場合はね。

患者　まさか。本当にそんなこと考えもしませんでした。

ディッキー　ありがとうございます。では、さようなら。

患者　さようなら、どうもありがとうございます。いい天気ですね？　さようなら。

ディッキーは患者をドアのところまで案内して送り出す。ドアのところでゴーライトリーを見かける。

ディッキー　やあ！　お入りになりませんか？「二階に呼びかけて」ペン、お父様がお見えになったよ。

ゴーライトリーが入って来る。

ゴーライトリー　ちょうどペンに会いに上になるところだったんだ。

ディッキー　こちらへ来てお座りください。一服しましょうよ。

ゴーライトリー　患者が来るんじゃないのかね？

ディッキー　ああ、五時ちょうどに来ますが。ほかには誰も来ないと思います。ここでお茶を飲んでも構いません。

ゴーライトリー　どんな調子かね？

ディッキー　さっぱりです。見てください、たったの二ギニーですよ。今日の午後稼いだのはこれだけなんです。

ペネロペが入って来る。

ペネロペ　まあ、お父様でしたの？

ゴーライトリー　お前の父君にキスしておくれ、かわいい子。新しい服を着てるね。

ペネロペ　結構気に入ってるんだけど、どうかしら？

ディッキー　また新しいフロックだね、ペン？

ペネロペ　ええ、あなた。どうして？

ディッキー　いや、何でもないよ。
ペネロペ　はやっている医者のお妻は着る物にたくさんお金をかけなければいけないのよ。

ゴーライトリー　ディッキーは景気がとても悪いと嘆いている。

ディッキー　この嫌な天気で何が期待できますか！　来る日も来る日も晴れていて雨は降らずに寒くて。この秋は霧が出たこともなかった。これじゃ医者に来

る機会がない。みんなが元気でいられて当然だ。時代はますます悪くなっている。今は誰もがちゃんとした下水設備を持っている。おせっかいな政府は国民にきれいな水を供給している。もし特許薬がなくて健康を気にしすぎる人間もいなかったら、ロンドンの医者のは半分は飢え死にするでしょうね。

ペネロペ 心配することないわ、ディッキー。その内にうちの玄関のすぐ外で交通事故があるかもしれないもの。

ディッキー 全員即死だったら、ついてないってことだね。いや、僕が望んでいるのは、実際に伝染性の病気がかなりはやることであって、非常に複雑な型のインフルエンザがはやって、人々が一月くらい寝ていなければならぬようなことなんだよ。

ペネロペ で、もしわたしがかかったらどうなの？

ディッキー それは、君がかかったら、通りの向かい側の不法法者が君を扱わなければならぬだろう。そして、君が僕の妻だから、治療代を請求できなくて、時間を無駄にしなければならなかったことに歯ぎしりするだけだろうね。

ペネロペ 通りの向かい側の不法法者ってロジャース先生ね。わたしはあの先生の方がディッキーよりずっと好きだわ。

ディッキー 気取った奴だ。

ペネロペ あの先生は患者の扱い方がとてもいい感じなの。

ディッキー 君は僕の患者の扱い方を知らないんだ。「自分の手を見ながら」そうだが、ちよつと手を洗いに行つてこなければ。ピクリン酸を浴びているからね。

出て行く。

ペネロペ お母様はどこにいるの？ 異教徒を改宗させているのかしら？

ゴーライトリー アルバートホールという安全で離れたところからね。

ペネロペ 「話し方を変えて」お父様独りで来てくださつてよかつたわ。

ゴーライトリー どうかしたのかい？

ペネロペ 「急に激して」もうやっていけない。我慢の限界だわ。

ゴーライトリー ディッキーはまだ……？

ペネロペ ええ。あの人が彼女のどこがいいと思つているのか想像もつかなくて。時々彼女のことをじつと見ては、わたしにはなくて彼女が持っているものは何かしらと思うの。わたしがブスだなんて思わないでしょ？

ゴーライトリー もちろん。もしそうだったら、古代のスパルタ人みたいにお前が生まれた時に道端に捨てていただろうね。

ペネロペ 私がとても魅力的だって言う気のある男の人はたくさんいるもの。

ゴーライトリー 言わせてやったらどうだい？

ペネロペ お父様だったら、お父様はわたしが出会つたことのある中で一番不謹慎な親だわ。

ゴーライトリー 「賛成しかねるようにちよつと肩をすくめて」言わせてやるのが賢明かもしれんぞ。

ペネロペ 「頭を振りながら」いいえ、もう一度ディッキーを取り戻せるかどうか分らないけど、あの人の嫉妬心を掻き立てることで取り戻すことはしたくないの。ほかの人がわたしに恋していると思わせることでしかあの人の愛を得られないのなら、あの人の愛なんか欲しくないわ。

ゴーライトリー 二足す二が決して五にはならないことを思い出すんだ。

ペネロペ 「こらえかねて」意見するのは簡単だわ。じつと座って見ているだけでいいんですもの。わたしは実際にやらなければならぬのよ。一番困ることは、やるべきことが何もしないことだということよ。

ゴーライトリー お前。

ペネロペ さあ、お父様、さっぱり分からんというような顔をしないでちようだい。

さもないと、頭めがけて何か投げつけるわよ。立ち上がってやれることがあればそれほど悪くないけど、わたしはじつと座って我慢してなきやならないのよ。この一月、顔で笑いながらわたしが何に苦しんでいたか、お父様には分からないわ。心を痛めながら笑っていたのよ。ディッキーがちようどエイダ・ファーガソンに会いに行くところだと知った時、わたしはあの人をひやかしたわ。あの二人が一緒にいられるように、ちよつとしたパーティーを何回かお膳立てしたのよ。エイダ・ファーガソンがわたしの目が赤いを見てディッキーに言うといけないから、独りで泣くことさえしなかったわ。あの人は毎日、この一月一日も欠かさず彼女と会っていたけど、ずつとわたしは機嫌よく、愉快に、楽しそうにしていたのよ。

ゴーライトリー でも、彼はどうやって時間をやりくりしているのかね？

ペネロペ もちろん、仕事をさぼり続けてきたのよ。自分が診なければならぬ人のところに助手をやってね。マック夫人のことは覚えていてでしょ？

ゴーライトリー 「ほほえみながら」居もしないマック夫人のことかね？ 覚えていてるよ。

ペネロペ わたしがどれだけマック夫人を憎んでいるか、分かってもらえたらなあ！

彼女は何度も手術を受け続けてきたのよ。彼女はほぼ週に一度手術を受けて、ディッキーはその日一日車で出掛けるんだから。

ゴーライトリー 彼女はポアコンストリクター（獲物を締め殺す熱帯アメリカの大型ヘビ）の体質を持っているに違いない。

ペネロペ そして、奇妙なことに、彼女が手術を受ける時には、必ず競馬があるのよ。彼女はケンプトンのデューク・オブ・ヨーク・ステークスの間に手術を受けて、チェザレヴィイチ（毎年秋にニューマーケットで開催されるハンデイクヤップレース）の間にもう一つ、サンダウンの間に三つ目の手術を受けたんだから。

ゴーライトリー 何という不思議なことだ。

ペネロペ エイダ・ファーガソンが競馬好きだと知るまではね。そして、わたしが腹立たしいのは、間違いないディッキーが彼女のために馬券を買っているこ

となの。彼女の賭けた馬が勝つともうけは彼女がポケットに入れるけど、負けても彼女は賭け金を払わないのよ。

ゴーライトリー 彼女は随分たちが悪いみたいに聞こえるけど。どうしてそう思うのかね？

ペネロペ わたしだってそうするんだから……。かわいいそうなディツキー、今月はあの人にかなりのお金を使わせることになるわ。

ゴーライトリー どうして？

ペネロペ あの人が出掛ける時はいつも、わたしが一日中買い物をする事で自分を慰めなければならぬからよ。わたしは大抵かなり高いものを選ぶもの。

ゴーライトリー 浮気者の夫の扱い方でそんな忠告をした覚えはないよ。

ペネロペ ええ、わたしが自分で付け加えたのよ。

ゴーライトリー でも、どうして今日わたしを呼んだのかね？

ペネロペ もうおしまいだからよ。もう耐えられないわ。今朝ディツキーが言うには、マック夫人がよくなくなって動かせるまでになったから、彼女をパリまで連れて行ってリビエラ行き列車に乗せるつもりなんですって。

ゴーライトリー お前が言ってるのは……。

ペネロペ 「怒ったように肩をすくめて」エイダ・ファアガソンはちよつとパリに旅行したいのよ。

ゴーライトリー どうするつもりかね？

ペネロペ あの人に二人の内のどちらかを選ぶように言うつもりよ。あの人を行かせないためなら何でもするわ。あの人が行ったらもうおしまいだって教えてやるんだから。

ゴーライトリー ええっ！

ペネロペ 「ええっ！」なんて言わないで。わたしが正しいって言ってちょうだい。そうするしかないって言ってちょうだい。

ゴーライトリー でも、お前は全く間違ってると思うよ。

ペネロペ 間違ってるですって！

ゴーライトリー 彼がパリに行きたいのだと思っちゃいけないんだ。正気で危険を冒そうという男はいないんだから。

ペネロペ それなら、どうしてあの人が行こうとしているの？

ゴーライトリー 彼女が行かせようとしているんだ。そして、こういう状況にいる女が男の望まないことを一度でもやらせたら、それは終わりの始まりなんだよ。

ペネロペ どうして分かるの？

ゴーライトリー 分からないけど。そう思うのさ。

ペネロペ 生涯を数学の研究に費やした結果、随分いろいろな知識に結び付いたみたいね。

ゴーライトリー いい子だから、ペン、二人を行かせてやりなさい。

間があり、ペネロペは顔を両手で支えて、まっすぐに父親を見る。問題をじっくり考える。

ペネロペ お父様がわたしにかなりの気転とかなりの忍耐力とかなりの自制心が必要だって言ったのは正しかった。驚いたわ！

ゴーライトリー 「ほほえみながら」それで？

ペネロペ わたしは何もしないつもり。口をつぐんで、ほほえんで、冗談を言うつもりだけど、……。

ゴーライトリー それで？

ペネロペ たまらなく欲しい帽子がいくつかあるの。ちよつと行って、フランソワーズに電話して、店にあるのを全部送ってくれるように言うつもりよ。

ディッキーが入って来る。

ゴーライトリー 帰るところだったんだ。

ディッキー 残念です。どうしてそんなに早く？

ゴーライトリー 妻を迎えに行く約束なんだ。

ペネロペ 戻ってらしてね。結婚以来、わたしがディッキーと離れているのはこれが初めてだから、お母様の胸に頭を隠したくなると思うの。その間、お父様にはわたしの手を撫でてほしいのよ。

ディッキー 君にはそんなに平静でいてほしくないな、ペン。少しは気分を害してもよさそうなのに。

ペネロペ でも、あなた、わたしは次から次へと起きる激しいヒステリーの発作に準備万端整えているところなのよ。これ以上はできないわ。

ディッキー 僕をからかっているんだ。そうなんだ。

ペネロペ 「意味ありげに」結局のところ、ディッキー、あなたは行かないですめば行かないだろうとわたしには分かっているの。行くのが自分の義務だと感じていないからだけなんでしょ？

ディッキーはかなりばつの悪い思いをしているが、何も言わない。

ゴーライトリーが一瞬の沈黙を破る。

ゴーライトリー 夜行で行くのはどうしてかね？

ディッキー 「ほっとして」ああ、それはですね、人出がかなり少ないからですよ。

病人を運ぶのにずっと都合がいいですからね。

ペネロペ 「陽気に」さぞかし楽しいでしょうね。愛する相手と一緒にパリまで旅行する楽しそうな若い男たちばかり目にするんですもの。旅の途中で誰にも見られないように、そういう人たちは必ず夜行で行くって聞いているわ。

ゴーライトリー さてと、急がなければ。さもないと、遅れてしまう。ではまた。

ペネロペ　あまりぐずぐずしないでね、お父様。お父様が戻る前にわたしが自分の感情に負けるといけないから。

ゴーライトリー　「うなずきながら」あとで会えるかもしれないね、ディッキー。

ゴーライトリーは出て行く。ペネロペは今にもついて行きたげにする。

ペネロペ　わたしは二階に行ってお茶を飲むわ。

ディッキー　「かなりぎこちない態度で」君とちよつと話が見たいんだけど、ペン。

ペネロペ　それなら、上の客間にいらつしやいよ。

ディッキー　僕はここで話したいんだ。

ペネロペ　「座りながら」分かったわ。話してちょうだい。

ディッキー　何なら、お茶を持って来させればいいよ。

ペネロペ　いいの。お茶はそのまま置いて、胃を悪くしてやるんだから。

ディッキー　「ポケットから書類を取り出して」ペネロペに渡しながら「これが何だか分かる？」

ペネロペ　「魅力的なほえみを浮かべて」請求書じゃないの、あなた？

ディッキー　請求書だということが分かって、感謝すべきかな？

ペネロペ　「請求書の一つをひらひらさせながら」これはわたしが着ていたフロックのかわ。あなたは随分高いなんて思っていないわよね？「請求書を見下ろしながら」ほら、あなたは仕立て代を払わなければならないのよ。

ディッキー　「怒りを抑えようとしながら」それで、それを僕にどうしろというのかね？

ペネロペ　「興味なさそうに」何なら、ぐず籠に入れてもいいけど、払った方が手っ取り早いでしょうね。

ディッキー　「かっとなって」なあ、いいかい、ペン。とんでもないことだ。こんなこと、許すつもりはないからな。

ペネロペ　「見た目はすぐ驚くが、機嫌よく」あなた、わたしがちよつとした物をいくつかくらいで、大騒ぎすることはないわ。わたしは全くぼろの服を着ていたけど、あなたはわたしが身ぎれいに行っているのが好きだと思つたのよ。

ディッキー　「いまましい、僕が貧乏人だというのに、君はこの一月で百五十ポンド以上も使ったんだ。」

ペネロペ　「冷静に」そんなになるの？　マック夫人みたいな患者を抱えたのはラッキーよね？

ディッキーはペネロペを疑いの目で見るが、マック夫人の話題を避けるために、怒って怒鳴り出す。

ディッキー 僕に言わせれば、そんなのは意味のない贅沢だ。なあいいか、ここにあるのは青い生地 of 服に三十五ポンド——途方もない額だ——十月九日とある。

ペネロペ ケンプトンのデューク・オブ・ヨーク・ステークスね。

ディッキー どういう意味だ、ケンプトンのデューク・オブ・ヨーク・ステークスって？

ペネロペ マダム・クロードがわたしを見てとても驚いたから、その日がケンプトンのデューク・オブ・ヨーク・ステークスだったって、たまたま覚えていなの。ほんの偶然なんだけど、彼女自身は競馬に行ってなかったのよ。

ディッキー でも、一体どうして青い生地 of 服を買いに行こうなんて思い立ったのかね？

ペネロペ 「愛らしく」それは、あのね、あなた、あの日は初めてマック夫人に手術をした日だわ。それで、あなたが一日中いなかったから、わたし、すごく落ち込んでいてさびしかった。それに、あなたがどれだけ不安か分かってたから、それを考えるとわたしも不安になって、それで、ちよつと気晴らしに青い生地を注文しに行っただけなの。

ディッキーはペネロペをちらつと見てから請求書に目を落として話しかけようとするが、何も言わない。ペネロペはディッキーを見守る。

ディッキー 「突然に」それにご覧よ、十月十三日にはアーミン毛皮のストールとマフとあるね。

ペネロペ ええ、それは気の毒なマック夫人の二回目の手術の日だったわ。

ディッキー おい、これはひどいと思うな。

ペネロペ それは、あなたがいない間、わたし、何かしなければいけないのよ。それに、みんなが双眼鏡を持って、リバプール・ストリートに向かって車で走り去って行くのを見て、とてもみじめな気持ちになったわ。

ディッキー 何だつて。

ペネロペ あのね、十月十三日はチェザーレヴィイチの日だったわ。

ディッキー ほかのも全部同じように説明する気なんだな。「請求書を見ながら」十月二十二日とある。

ペネロペ サンダウン競馬だわ。「ディッキーは不機嫌に請求書を見直すか、話しはしない。」どうしてあなたはいつも大きなレースと同じ日に手術をするのかしら。

ディッキー 変だと思ってるんだね？

ペネロペ ちよつとね。

ディッキー そんなの、ちよつとも変じゃないよ。ピーター・マースデンのいつもの変わったやり方なんだ。手術をしたのはピーター・マースデンだって話したよね？「ペネロペはうなづく」実は、彼は競馬に目がないんだ。それで、

大金をすっちゃまったものだから、自分が絶対に競馬に行けないように、重要な手術は決まって競馬の日と同じ日にするんだよ。

ペネロペ おかしなじゃないかね。「ディッキーはじろつと目を上げる。ペネロペはほほえみながら」ピーター・マースデンよ、あなたのことじゃないわ、あなた。

ディッキー なあ、ペン、この請求書のこととはもうこれ以上言わないことにしようよ。

今回は僕が払うから……。

ペネロペ そうしてくれるだろうと分かっていたわ。

ディッキー でも、これ以上は駄目だよ。

ペネロペ どうしてあなたがそんなに騒ぎ立ててるのか、本当に分からないわ。だって、マック夫人でたんまり稼いだんですもの。

ディッキー 捕らぬたぬきの皮算用をしちやいけなないよ。まだ一ペニーももらっていないんだから。

ペネロペ でも、もう彼女が出掛けるんだから、請求書を出すことはできるわ。

ディッキー そんな、とてもできないよ。そんなことしたら、彼女を殺しかねないからね。

ペネロペ あなたはその危険を冒してもいいと思わないの？

ディッキー 君は随分冷酷だと思うな、ペン。君は僕がその年寄りの婦人にとっても愛情を感じているのを忘れている。僕は彼女を患者としてばかりでなく友達としても考えているんだ。

ペネロペ 多分、彼女は遺言書であなたに何かを遺すんでしようね。わたしたちが欲しいのはブルーム型の電気自動車よね？

ディッキー そんなもの、もらうべきじゃないよ。僕は患者から遺産をもらう医者に対する反感が一番強いんだから。

ペネロペ でも、彼女をパリまで連れて行くことで少なくとも百五十ポンドは請求できるようになるわ。

ディッキー 「ぎくつとして」ペン！

ペネロペ まあ、びっくりした。

ディッキー もうこれ以上買うつもりはないよね？

ペネロペ でも、あなた、明日の朝起きた時にあなたがここにいないと、わたし、ひどくさびしくて沈んだ気持ちになりそうな気がするの。

ディッキー 「遮って」聖人のお母さんに泊ってもらいなよ。

ペネロペ それに、かぶれる帽子を全然持っていない気がするの。

ディッキー 「断固として」ペネロペ。

ペネロペ 「言葉巧みに」素敵な帽子がいくつかあれば、フロックがずっと長く使えるわ。いいこと、手を替え品を替えて着れば、新しいガウンを着ていると思われるんだから。

ディッキー で、君が沈んだ気持ちを克服するのに帽子がいくつ必要なのか訊いてもいいかな。

ペネロペ 「きっぱりと」三つよ。

ディッキー そんな馬鹿げた話は聞いたことがない。

ペネロペ　ねえ、いいこと、わたしは喜んであなたに妥協するわ。一つ五ポンド以上はかけないって約束するから。百五十ポンドの中から払えるわ。

ディッキー　実を言うと、ペン、マック夫人は患者というよりもむしろ友達でね。それに、僕が思ったほど裕福じゃないんだ。パリまで彼女についていくことについては何も請求しないつもりだよ。

ペネロペ　「極めて断固として」あら、駄目よ、ディッキー、とんでもないわ。あなたには気遣うべき妻がいるんだから——もしあなたが明日死んだら、わたしは生活するお金が全然ないのよ。あなたにはドンキホーテみたいに騎士を気取る権利はないの。そんなのフェアじゃないわ。

ディッキーが応えようとするちょうどその時にペイトンが入ってくる。

ペイトン　ご婦人がお目にかかりたいそうで、旦那様。

ディッキー　「いらいらしながら」こんな時間にか？

ペイトン　ワトソン夫人です、旦那様。

ディッキー　ああ、そうか、分かった。ご案内して。

ペイトンは出て行く。

ディッキー　ありがたい、いい人が来た。とにかく、彼女から何ギニーかもらえらるう。「カルテを見ながら」四回来ている。五ギニーにはなるだろう。そうだな、それくらいはもらいたい。

ペネロペ　彼女はどこが悪いの？

ディッキー　分からないけど、分かっているふりをしているんだ。だけど、彼女も多分気づかないだろう。

ペネロペ　わたしは行くわ。ちよつど電話をしなきゃいけない人がいるから。

ペネロペは出て行く。ディッキーはいらいらしながら行ったり来たりする。ワトソン夫人が現れると、ディッキーはすぐに仕事の態度を装って、非常に人当たりがよく親しみのもてる感じになる。ワトソン夫人は小柄な老婦人で喪服を着ている。

ディッキー　さてと、ワトソン夫人でしたね？

ワトソン夫人　こんなに遅い時間に来て、ご迷惑に違いありません。先生が五時以降は誰も診ないのは存じていますが、出掛ける予定があるもので。

ディッキー　お会いできて嬉しいです。本当ですよ。

ワトソン夫人　明日、娘と一緒にリビエラへ発つ予定なものですから、出掛ける前にもう一度診ていただきたいと存じまして。

ディッキー　構いませんよ。で、どうしておられましたか？

ワトソン夫人 「これ以上ないくらい満足して」 ああ！ どうもこうもありません。

全然よくなりません。

デイツキー ちゃんと薬を飲んでいましたか？

ワトソン夫人 「楽しげに」 はい。でも、全然効きませんの。

デイツキー 膝の反応を試してみましようか？

ワトソン夫人が片方の脚をもう一方の脚の上に組むと、デイツキーは膝の下をぼんと叩く。脚はちよつと上に上がる。

デイツキー 全く大丈夫みたいですね。

ワトソン夫人 ベンジャミン・ブロードステアーズ先生があらゆることを試しましたが、治りませんでした。それで、ウィリアム・ウィルソン先生のところに参加しましたら、ベンジャミン・ブロードステアーズ先生から言われたことは一切しないようにと言われまして、ますます悪くなったんです！

デイツキー あなたはそのことがことのほか楽しいみたいですね。

ワトソン夫人 わたしはロンドンのすべてのお医者様のところに行つたことがありますけど、皆さん、わたしのは不思議な症例だつておっしゃいます、わたしはお医者様に診ていただくのが好きですし、お医者様はわたしに大変な興味を持ってくださいます。わたしのことで何時間も費やしてくださいました。かけていただいたあらゆるご親切には感謝のしようもございませんわ。デイツキー そう言っていただけるととてもありがたいです。今日は何かほかのもの

を試そうと思います。

ワトソン夫人 まあ、うんと強くしてくださいね、先生？

デイツキー あなたは中に何者かが入っている薬がお好きみたいだ。

ワトソン夫人 いかにも、薬を飲むのは好きですわ。大切なことですもの。今は娘が結婚してしまいましたから、わたしは独りぼっちなんです。『薬局方』（薬品の製法・品質・用法などを載せた政府刊行物）に載っている薬は全部飲んだことがあると思いますけど、どれもこれもちつとも効きませんの。

デイツキー 「ワトソン夫人に処方箋を手渡しながら」だとしても、これは効くんじやないでしょうか。一日三回、食事の前に飲まなければいけません。

ワトソン夫人 「処方箋を見ながら」おや、でもこれは前にいただいたことがありますわ、オファレル先生。ほんの二、三か月前にアーサー・トーマス先生からいただきました。

デイツキー でしたら、もう一度試してみてください。あなたはその薬をまともに試さなかつたんじゃないですか。

ワトソン夫人 先日『薬局方』で、ドイツのお医者様が神経の症例にすぐよく効く新しい薬を発見したというのを読みました。きつとその薬がわたしにちょうど合うんだと思います。

デイツキー 一体何のためにあなたは『薬局方』を読んでいたんですか？

ワトソン夫人 あら、わたしは必ず『薬局方』と『英国医学会会報』（英国医師会の週報）を読みます。だって、亡くなった夫が仕事で取らなきゃならなかったんですもの。

ディッキー 「あえぎながら」ご主人が医者だったと言うんじゃないですよね？

ワトソン夫人 あら、わたしは医者未亡人だってお話ししたとばかり思っていますわ。

ワトソン夫人がしゃべり続ける間、ディッキーは動揺を抑えようとする。

ワトソン夫人 お医者様が悪く言われるのは聞くに堪えません。わたしの役には立ちませんが、皆さん親切そのものでした。粗末に扱われたことは一度しかないし、それは——信じていただけのならば——ただの取るに足らない人でした。わたしが症状をすっかり話すと、そのお医者様は言いました。

「奥さん、食事は大丈夫ですか？」って。「はい、朝は朝食、十一時にスープを少しいただきます。そのあと昼食を食べて、必ずお茶をたっぷり飲み、七時半に夕食を少し食べて、寝る前にパンと牛乳をいただきます」ってわたしは言いました。そうしたら、そのお医者様が言いました。「奥さん、睡眠は大丈夫ですか？」って。「はい、年の割にはとてもよく眠れます。決まって八時間か九時間は寝ています」ってわたしは言いました。そうしたら、そのお医者様が言いました。「奥さん、歩くのは大丈夫ですか？」って。「まあ、はい、いつも一日に四マイルは必ず歩きます」ってわたしは言いました。そうしたら、そのお医者様が言いました。「わたしの所見では、あなたは全然どこも悪くありませんよ。お帰りください」って。

ディッキー おやまあ。

ワトソン夫人 そこで、わたしはただもうそのお医者様をじろじろ見るだけで、言いました。「先生、先生の所見はベンジャミン・ブロードステアーズ先生ともウィリアム・ウイルソン先生ともアーサー・トーマス先生とも違います」って。そして、わたしは診察代を払おうとも言わずに、ただもうさっさと部屋をあとにしました。「いたずらっぽく」あの新しいお薬はいただけないんですか？

ディッキー 正直なところ、あなたに必要なのは必ずしもその薬ではないと思います。ワトソン夫人 分かりました。先生が一番よくご存じなんでしょうから。もうこれ以上お時間を取らせる訳にはまいりませんわ。

ディッキー 「皮肉っぽく」いや、わたしの時間なんかには価値はありません、ありがとう。

ワトソン夫人 「言葉巧みに」おいくらお支払いすればよろしいのか教えていただけますでしょうか？

ディッキー いや、医者のお奥さんですから、もちろん、診察代をいただくなんて夢にも思っていないせん。

ワトソン夫人 それはご親切に。でも、ささやかなプレゼントをさせていただかなければ。

ディッキー 「かなり小さな声だが、ちょっと顔を輝かせながら」おや、そうすか、あのう……。

ワトソン夫人 わたしは主だったロンドンのお医者様みんなに診ていただいて、皆さんどなたにも一ペニーも請求されませんでしたけど、いつもささやかなプレゼントをさせていたたくんです。あなた方お医者様はどんな天気でも出掛けなければならぬのに決して何もまとわないのを存じています。ですから、毛糸のマフラーを差し上げるんです。

ワトソン夫人はバッグから大きな赤い毛糸のマフラーを取り出す。

ディッキー 「ぼかんとして」ああ、どうもありがとうございます。

ワトソン夫人 わたしが自分で編みましたの。

ディッキー あなたがですか！

ワトソン夫人 ベンジャミン先生は冬はいつも使っていて約束してくださいました。とても暖かいことよ。

ディッキー どうもありがとうございます。

ワトソン夫人 では、さようなら、どうもありがとうございます。

ディッキー リビエラから戻られたら、ロジャース先生に診てもらうのも悪くないかもしれません。先生はちょうど通りの向かい側に住んでいますからね。あなたのような症例には、あの先生がとてもいいですよ。

ワトソン夫人 どうもありがとうございます。

ディッキー さようなら。

ワトソン夫人が出て行き、ディッキーはドアを閉める。ディッキーはもう一つのドアのところを走って大声で呼ぶ。

ディッキー ペン！ ペン！

ペネロペの声 はい。

ドアにノックの音がする。

ディッキー 「苛立って」どうぞ。

ワトソン夫人が入ってくる。

ワトソン夫人 折り入ってお訊きしたいことがありましたのに、忘れるところでしたわ。ベンジャミン・ブロードステアーズ先生は焼いたパン以外は決して食べないとおっしゃったんですけど、ウィリアム・ウイルソン先生

は焼いたパンは少しもいいことがないから、焼いてないパンだけを食べるべきだとおっしゃいました。さて、どうした方がいいのかしら？

ディッキー 「じっくり考えているかのように、真剣に」それは、わたしがあなたなら、パンの片側だけ焼いて食べるでしょうね。

ワトソン夫人 どうもありがとう。さようなら。あのマフラーが気に入っていただけるといいんですけど。

ディッキー きつと気に入りますよ。さようなら。

ワトソン夫人がまた出て行き、ディッキーはドアを閉める。

ディッキー ペン！ ペン！

ペネロペが反対側のドアから入って来る。

ペネロペ どうしたの？

ディッキーはマフラーを手に持って猛然とペネロペの方に近寄って行く。

ディッキー ご覧よ！ これが診察代だ！ これがだよ！

ペネロペ 毛糸のマフラーだわ。

ディッキー 馬鹿なこと言わないで、ペネロペ。これが毛糸のマフラーだということくらい、僕にも分かるよ。

ペネロペ でも、どういふことなの？

ディッキー 彼女は医者者の未亡人なんだ。もちろん、何も請求できなかった。彼女は今日まで隠していたんだ。あのね、ペン、医者者の妻が夫より長生きするのは許されるべきじゃないんだ。

ペネロペ まあ！

ディッキー 君も未亡人になったら、ペン、一流の医者が集まっているハーリー・ストリートの片側をずっと行ってから反対側をずっと戻って全部の医者に診てもらいたまえ。

ペネロペ でも、わたしが病気じゃなかったら？

ディッキー いまいますしい、君が僕を失ったら、不健康を楽しむくらいのことではできるはずだ。

ペイトンが入って来る。

ペイトン すいませんが、旦那様、ワトソン夫人が一分だけお会いできないかとおっしゃってます。

ディッキー 「あきらめたように」分かった。

ペイトンは出て行く。

ディッキー 今度は一体何がお望みなんだ？

ペイトンがワトソン夫人を部屋の中に案内する。

ワトソン夫人 わたしを見るのはさっきのが最後だったなんてお思いにならないでね。ディッキー 「当たり障りのないように」とんでもない。とんでもない。

ワトソン夫人 先生がパンの片側だけを焼くようにとおっしゃったことについて考えていたんですが……。どっちの側にバターを塗ればよろしいのかしら？

ディッキー 「手を顎に当てて」うーん。うーん。バターは焼いた方の側にお塗りなさい。

ワトソン夫人 まあ、ありがとう。では、もう一つだけお訊きしたいことが、少しのジャムでも差し障りがあるとお思いですか？

ディッキー いや、ちよつとくらいなら問題ないと思いますが、バターを塗ったのと同じ側に塗ってはいけません。

ワトソン夫人 まあ、ありがとう。さようなら。本当にありがとうございました。ディッキー どういたしました。どういたしました。

ワトソン夫人は出て行く。

ディッキー 「ドアに向かって拳を振りかざしながら」サテイー……。そうだ。「サテイー」だ。

ペネロペ ディッキー、何を言ってるの？

ディッキー 思い出すのに十分もかかった。医者の方の未亡人がやるべきことはこれだ——「サテイー」だ。ヒンドゥー教徒みたいだね。

ペネロペ 夫が死ぬと生きてまま焼身自殺するのね？

ディッキー ピンポーン。「サテイー」だ。そうだ。

ペネロペ でも、あなた、わたしは嫌だわ、自分の骨を燃やしてあなたのお葬式に花を添えるなんて。

ディッキー おや、君は僕を愛していないんだ。

ペネロペ すごく愛してるけど、そこまでやれというのは多くを求めすぎじゃないの？

ディッキー いいや、君は以前ほど僕をちやほやしてくれない。すっかり変わったね。気づいたことがたくさんあるよ。

ペネロペ 「ディッキーを素早く見るが、からかうような態度を取り続けながら」あら、そんな馬鹿な。

ディッキー 君は最近変わったよ。朝見送りに下りて来ないし、何時に帰るのかも訊かない。朝食のあと、僕がパイプをふかしながら新聞を読んでいると、いつも君は僕の椅子の肘掛けに座ったものだった。

ペネロペ あなたはそれが嫌だったんでしょ？

ディッキー もちろん、嫌だったけど、君が僕を好きなことが分かった。今はもうやってくれないから、僕は寂しいんだ。

ペイトンが入って来る。ファーガソン夫人が続く。ペイトンは引き下がる。

ペイトン ファーガソン夫人です。

ディッキーはちよつと驚いて、かすかに困ったような素振りを見せる。ファーガソン夫人が何のために来たのか、ディッキーには分からない。

ファーガソン夫人 あなたはここにいてってメイドが言うものだから、直接部屋に案内してくれるように頼んだの。ご迷惑じゃなかったかしら。

ペネロペ もちろん、迷惑じゃないわ。どこにしる、わたしたちはあなたに会えて嬉しくてよ。お茶はいかが？

ファーガソン夫人 いいえ、結構よ。実は、オフアレル先生にお仕事上のことで会いに来たの。

ペネロペ 病気じゃないわよね？

ファーガソン夫人 このところ、あまり調子がよくなくて、お医者様に診ていただきたいと思ったの。「ディッキーに向かって」診ていただけますか？

ディッキー できることは何でもしますよ。

ファーガソン夫人 でも、間違いなく本当にお仕事上のことで来たの。お支払いはしたいわ。

ペネロペ そんな、馬鹿な、わたしのお友達からお金をいただくなんて、ディッキーは夢にも思わないわ。

ファーガソン夫人 いいえ、その点については、わたし、最も厳格な主義を持っているの。お医者様にただで診てもらいたい人たちって、ひどすぎると思う。ぜひ通常の料金をお支払いしたいわ。

ディッキー まあまあ、それはあとにしましょう。

ペネロペ わたしは外しましょうか？

ファーガソン夫人 いいかしら？ 第三者の前で症状を話すのは、ちよつときまりが悪いから。

ペネロペ もちろんよ。

ファーガソン夫人 五分で済むから。

ペネロペ 言っときますけど、ディッキーの治療は本当にひどいわよ。

ペネロペは出て行く。

ディッキー 気分が悪いとはかわいそうに。昨日は大丈夫だったのに。

ファーガソン夫人 「笑いながら」今ままでこれほど調子がよかったことはないわ、ありがとう。「ディッキーはいささか驚く」お医者様だというのがあなたの利点ね。二人だけで会いたい時、奥さんの目と鼻の先で会えるもの。結構気が利いてると思わない？

ディッキー 「冷ややかに」全く。「ファーガソン夫人はくすつと笑う。そして、立ち上がって恐る恐るドアのところまで歩いて行き、突然荒々しくドアを開け放つ。」一体何をやってるんだ？

ファーガソン夫人 ペネロペが聴いていないか、確かめたかったのよ。

ディッキー 「きっぱりと」聴いてなくて当然だ。彼女は最もそんなことはしそうなない人なんだから。

ファーガソン夫人 まあ、あなた、これくらいのことですら怒らないで。聴く女はたくさ
んいるんですからね。

ディッキー そうなの？ そういう女性に出会う光栄に浴したことはなかったな。

ファーガソン夫人 くだらない。

ディッキー さて、どうやったら君のお役に立てるのか、教えてくれるかな？

ファーガソン夫人 「上機嫌で」駄目よ、そんなにすねて訊くんじゃ。わたしの手に
キスしてもいいわ。「ディッキーはそうする。」いいわ。まだ、怒ってるの？

ディッキー いいや。

ファーガソン夫人 わたしのこと、変わらず愛してくれてる？

ディッキー ああ。

ファーガソン夫人 愛してなくても「ノー」とは言わないでしょ？

ディッキー ああ。

ファーガソン夫人 ひどいわ！

ディッキー 「かなり苛立って」ねえ、一体何のために来たんだ？

ファーガソン夫人 今日はお優しいこと。

ディッキー 昨日別れる時に、全部決めたよね。切符を上げて、列車が発発する時間
も書いておいたし。

ファーガソン夫人 一つには、ペネロペに会いたかったの。

ディッキー どうして？

ファーガソン夫人 彼女が無邪気なのを見てると楽しくなるんですもの。彼女を見
て、彼女が自分の目と鼻の先で起きていることをいかに疑っていないかと
思うと、すごく楽しくなるのよ。彼女はわたしが今まで会った中で一番人
を疑わない人だわ。

ディッキー 君が何かを知りたがると、僕はすごく不安になるんだ。

ファーガソン夫人 ねえ、あなた、何のことを言ってるの？

ディッキー もし僕たちが用心しなければいけないのなら、それほどまずいことではないだろう。でも、彼女は僕たちのことを完全に信じてる。いつだって、僕たちを会わせてくれている。ちよつとでも疑う理由があるなんて、彼女の頭には全く浮かばないんだ。僕たちのやっていることは、自分を防御できない人間を殴り倒すようなものだ。

ファーガソン夫人 それは、あなたがもうわたしを愛してないってことかしら？

ディッキー もちろん、愛してる。精根尽き果てるほどそう言い続けてきただろ。

ファーガソン夫人 いいえ、もうわたしを愛してないのよ。男が気がとがめ始めるのは、愛するのをやめる時だけなんだから。「ディッキーはしょうがないな」というようにため息をつく。ディッキーが我慢しなければならなかったのは、この場面が初めてではない。「わたしはあなたのためにすべてを犠牲にしてきたわ。それなのに、わたしを侮辱するのね。外地でお国のために勇敢に仕えている夫のことを思うとかわいそうだわ！ ああ、ひどいわ、ひどいわ！

ディッキー でも、僕はペネロペにひどい扱いをするのは卑劣な気がすると言っただけだよ。

ファーガソン夫人 あなたはわたしの気持ちを考えていない。わたしがどう感じるか考えていないわ。わたしの夫はどうなるの？

ディッキー 僕は君のご主人のことはたまたま知らないけど、自分の妻のことは知っている。

ファーガソン夫人 そんなくだらないこと言わないで。あなたが自分の奥さんを知っているのは当たり前でしょ。

ディッキー だから、完全に卑劣漢みたいな振る舞いはしたくないんだ。

ファーガソン夫人 あなたがわたしを本当に愛しているなら、わたしのこと以外は何も、何も、何も考えないでしょ。

ファーガソン夫人はハンカチを目に持っていく。

ディッキー ああ、もう、泣かないで。

ファーガソン夫人 泣くわよ。今までこんなふうに扱われたことはないんですもの。

もうわたしを愛してないんなら、そう言ったらどうなの？

ディッキー いや、愛してるよ。でも……。

ファーガソン夫人 でも何よ？

ディッキー 「びくびくしながら」それは——えーと——ずっといいだろうと思うんだ。もし僕たちが——ちよつとの間、パリへの旅行を延期すれば。

ファーガソン夫人 「怒ってあえぎながら」まあ！ まあ！ まあ！

ディッキー ペネロペは信じきっている。

ファーガソン夫人 あなたとは二度と口を利かないわ。出会ってなければよかった。

ああ、どうしてそんなにわたしを侮辱できるの！

ファーガソン夫人はすすり泣きを始める。

ディッキー ああ！ ああ！ ねえ、泣かないで。つらくあたる気はなかったんだ。本当にごめん。

ディッキーはファーガソン夫人の顔から手を外させようとする。

ファーガソン夫人 触らないで。側に来ないで。

ディッキー 泣くのをやめたら、君のしてほしいことは何でもするから。ねえ、ペネロペが入って来たらって考えてみてよ。僕は君のリスクを考えていただけなんだ。もちろん、イギリス海峡を渡る旅ほど好きなものはないよ。

ファーガソン夫人 本当？

ディッキー ああ。

ファーガソン夫人 本当にわたしに来てほしいの？

ディッキー もちろんそうだよ、君がリスクを気にしないんならね。

ファーガソン夫人 「にっこりして」リスクを問題なしにするわ。

ディッキー えっ、どうするつもりなの？

ファーガソン夫人 一、二分待てば、分かるわよ。

ファーガソン夫人は完全に気を取り直して、上機嫌である。

ディッキー ペネロペに、もういいよって言ってもいいね。

ファーガソン夫人 いいわよ。「ディッキーがドアのところに行く」とおっと、忘れてた。わたししたら、すぐ忘れちゃうんだから。

ディッキー どうしたの？

ファーガソン夫人 あなたに会いに来た用事を忘れるところだった。あなたが大騒ぎしっぱなしだったから。

ディッキー 僕が大騒ぎしたって？ 気がつかなかったけど。

ファーガソン夫人 あなたに頼みたいことがあるの。怒らないわよね？

ディッキー 怒ったりしないよ。

ファーガソン夫人 もちろん、本当に大したことじゃないんだけど、頼むのはちよつと気が引けるのよね。

ディッキー そんな馬鹿な。もちろん、できることは何でもやるよ。

ファーガソン夫人 それなら、証券取引所の友達がわたしに確かな内部情報を教えてくれる……。

ディッキー そういうのはうまくいったためしがない。そういう内部情報のことは知ってるけどね。

ファーガソン夫人 あら、でも、差額をいくらか払わなくちゃいけないけど、絶対大丈夫よ。どういふことなのかすっかり分かっている訳じゃないけど、ソリ―・アブラハムが……。

ディッキー 「遮って」それが証券取引所の友達かい？

ファーガソン夫人 そうよ、どうして？

ディッキー いや、何でもない。古き良きスコットランドの名前だっというだけのことさ。

ファーガソン夫人 百八十ポンドの小切手を送ってくれて、ソリーが言ってるのよ。

ディッキーはびくつとして、沈んだ面持ちになる。

ファーガソン夫人 今すぐ、それを払うのはちよつとばかり都合が悪いの。わたしの収入がいつも半年ごとに支払われるのは知ってるでしょ。実際、銀行には百八十ポンドないのよ。わたしは絶対にお金は借りないことにしてるの——そんなことは耐えられないもの——それで、今行けるのはあなたのことろしかないって思ったの。

ディッキー 君がすぐく親切なのは確かだね。嬉しくなるほど、とは言えないまでも。

ファーガソン夫人 あなたならすぐくれるでしょうし、もちろん、儲けから返すつもりよ。

ディッキー ほう、それは恐縮だね。何とかするよ。

ファーガソン夫人 今小切手を書いてってお願いしたら、あまりにもご迷惑かしら？
そうしてもらえると、とても気が楽になるんだけど。

ディッキー もちろん。一も二もないよ。ところで、その株の銘柄は何なの？

ディッキーはデスクに座って、小切手を書く。

ファーガソン夫人 ああ、金鉱よ。「ヨハネスバーク・アンド・ニュー・エルサレム」
って言うの。

ディッキー 信用できそうな名前だね。

ディッキーはファーガソン夫人に小切手を渡す。

ファーガソン夫人 どうもありがとう。本当にご親切さま。さあ、ペネロペに見せるために、ちよつと処方箋を書いてちょうだい。

ディッキー 君は何事も忘れないね。

ディッキーは処方箋を書く。

ファーガソン夫人 診察代をお支払いしなければ。

ディッキー ああ、そんなのはどうでもいいのに。

ファーガソン夫人 あら、駄目よ、ぜひとも。それに、そうした方がずつともっともらしく見えるわ。

ファーガソン夫人は財布をのぞき込む。

ファーガソン夫人 あら、わたしったら何て馬鹿なんでしょ！ 財布に二シリング硬貨一枚しか入ってないわ。ひよつとして、一ポンド金貨を二枚お持ちじゃないこと。

ディッキー ああ、うん、持つてるよ。今日稼いだ唯一の金だ。

ディッキーはポケットから金を取り出して、ファーガソン夫人に渡す。ファーガソン夫人はそれを二シリング硬貨と一緒にデスクの上
に置く。

ファーガソン夫人 ありがとう……。ほら。とてもそれらしい金額に見えるわ。ペネロペの目に入るように、置いたままにしておいてね。

ディッキー 彼女を呼ぼうか？

ファーガソン夫人 わたしが呼ぶわ。「ドアのところへ行って呼ぶ。」ペネロペ、もう終わったわ。

ディッキー 「二階の声を聞いて」おや、伯父のダベンポートが来ているんだ。

ファーガソン夫人 あら、この前公園で会ったわよ。とても愛想がよかった。わたしはグレンガリーのファーガソンかって訊かれたわ。どういうことか分からなかったけど、そうだって言ったら、とても喜んでたみたい。

ディッキー 君がミス・ジョーンズだったことは教えない方がいいよ。教えたら、伯父は引付けを起こすからね。

ファーガソン夫人 あら、わたしはランディドノのジョーンズだって言うつもりよ。その方がスマートに聞こえると思うから。

ディッキー お世辞で「素晴らしい発明力」と言われるかもしれないものが君には備わっているね。

ファーガソン夫人 そんなの知らないけど、わたしは女らしい女だわ。だから、男に好かれるのよ。

ペネロペとバーローが入ってくる。

バーロー おや、ファーガソン夫人、これは思いがけず嬉しいことだ。

ファーガソン夫人 いけないわ、いけない方、あなたはとんでもない放蕩者だって聞いてますわ。

ペネロペ ダベンポート伯父様が？

バーロー 「喜んで」ああ、ああ。学生時代の話ですよ、ファーガソン夫人。

ファーガソン夫人 あなたの評判がどんなだか知っていたら、公園で半時間もお話しをさせなかったでしょうに。

バーロー 「嬉しくはしやぎながら」いや、聞こえてくること全部に耳をかしちやいけません。わしのようによく出歩く人間は必ず噂されるものです。我々の世界は非常に狭くて口やかましいんですから。

ファーガソン夫人 オファレル先生に処方箋を書いていただいてましたの。最近あまり調子がよくなかったものですから。

バーロー おや、それはお気の毒に。絵に描いたように健康で非常に美しく見えるのだが。

ファーガソン夫人 まあ、本当に残酷な方！わたしに同調して、何て具合が悪そうに見えるんだって、おっしゃっていただきたかったわ。

バーロー お宅に伺うことを許していただければ、同調するとお約束できますが、あなたが素敵に見えるときか言えないでしょうな。

ファーガソン夫人 どうもありがとう。わたしがパリから戻ったら、すぐにでも会いにお越しになって。

ディッキーはびくつとする。

ペネロペ あなた、パリへ行くの？

ファーガソン夫人 あなたに話すために来たのよ。本当に、わたしですぐ忘れちゃうんだから。お気の毒なマック夫人がわたしにパリまで一緒に来てくれなにかって頼むものだから。すごく運の悪いことが起きてしまっただけね。彼女のメードの母親が突然亡くなってしまっただけで、そのかわいそうな子は当然お葬式に行きたがっているの。だから……。

ペネロペ マック夫人にメードの代わりに来てくれて頼まれたの？

ファーガソン夫人 二日だけよ、もちろん。さあ、わたし、知りたいの。ねえ、正直に言ってみようかい。あなたは構わないかしら？

ペネロペ わたしが？

ファーガソン夫人 変わった女もいるから。わたしがオファレル先生と一緒にパリに行くって考えると、あなたが嫌がるかもしれないと思ったの。当然、わたしたちは一緒に戻って来ることになるし。

ペネロペ 何を馬鹿な！もちろん、一も二もないわ。一緒に旅行する人がいるのは、ディッキーにとっても素晴らしいことですよ。

ファーガソン夫人 なら、それで決まりね。わたしは何事も公明正大にやりたいの。

バーロー 「デスクの上の金貨を見ながら」君はお金をかき集めていたんだな、ディッキー。

ファーガソン夫人 あら、それはわたしの診察代ですわ。わたしはどうしても診察代をお支払いすると言いましたの——あなたには特に知っておいてもらいたいのよ、ペネロペ——わたしはこういうことにとっても几帳面なのよ。

ペネロペ あら、でも、ディッキーが受け取るはずがないわ。「ディッキーに向かって」あなたは強欲おやじだわ！

ディッキー そんなお金、望まなかったのは確かだ。

ペネロペ 本当にお金は懐に収めてちょうだい、エイダ。

ファーガソン夫人 「身を守るような手つきをしながら」いいえ、本当にできないわ。それがわたしの一つの主義なんですよ。

ペネロペ あなたの主義が素晴らしいのは分かるけど、ディッキーにはわたしの親友から診察代を受け取ってもらいたくないの。

ペネロペは金を手に取ってファーガソン夫人に渡す。

ファーガソン夫人 あら、まあ、いいけど、そんなふうに思われたら、どうすればいいか分からないわ。

ペネロペ お財布に入れて、もう何も言わないで。

ファーガソン夫人 まあ、申し訳ないわね。

ファーガソン夫人は金を財布に入れる。自分の金が消えていくのを見て、ディッキーは沈んだ顔つきになる。

ファーガソン夫人 それじゃ、本当に急がなければ。「バーローに手を差し出しながら」さようなら。忘れずに会いに来てくださいね。でも、憶えておいて、あのかわいいバレエダンサーのことはすっかりお聞きしますから。

バーロー 「それほど放蕩者だと思われることに喜んで」わしに無分別であることを求めているけません。

ファーガソン夫人 「ペネロペに向かって」さよなら、あなた。

ペネロペ 玄関まで一緒にするわ。

ペネロペとファーガソン夫人は出て行く。

ディッキー 「電話のところに行きながら」あなたがこれまでにバレエダンサーとお知り合いだったなんて信じられませんね。

バーロー いや、しかし、こちらがそういう仕事の連中と親密な人間だと思つと、我々の階級の女性たちは喜ぶんだ。

ディッキー セントラルの二三四番に。十人のうち九人のバレエダンサーが子供と亭主のために毎晩郊外の家に戻るつてことを、その女性たちが知つてさえいればねえ！ ちょっと、株式仲買人に電話したいので。そちらは、ロバートソンだね？ まあ、「ヨハネスバーグ・アンド・ニュー・エルサレム」つていう金鉱のことで何か知つてるかな？ どうしようもないだつて？ そんなことだろうと思つたよ。それだけだ、ありがとう。「受話器を置き——自分に向かって、いまいましそうに」百八十ポンドがパーだ。

バーロー いいかな、ディッキー、ちょっと時間があるようだから、少し専門的なアドバイスをしてくれないかな。もちろん、診察代は払わないがね。

ディッキー 何てこつた！ 僕は慈善家と同じだ。寄付による支援すらないんだから。

バーロー 実はな、以前ほどほっそりしていないことに最近気づいたんだ。

ディツキー それに気づくのに大した洞察力は必要なかったはずですね。

バーロー わしが求めているのは当意即妙の答えではなくて、ディツキー、アドバイスなんだよ。

ディツキー 年甲斐もなく容姿のことでよくよすべきじゃありません。

バーロー 実を言うと、わしはあるとても魅力的な女性にいささか感銘を与えたとうすうす感じておるんだが……。

ディツキー 「遮って」僕のアドバイスを聞いて、その感銘が消えてしまわないうちに早く結婚なさい。

バーロー 君は変に思うかもしれないが、彼女は人妻なんだよ。

ディツキー それなら、躊躇しないで——ずらかるんです。

バーロー どういうことかね、ディツキー？

ディツキー ねえ伯父さん、伯父さんは僕が息子だといってもいいくらいの年だつていうのに。人妻といちゃつくというのは、今までに編み出された楽しみごとの中でその楽しさが最も誇張して言われていることなんです。ご用心なさい！ それだけです。ご用心なさい！

バーロー どうしてかね？

ディツキー その人妻は、伯父さんを手足もろとも縛り、首に引き綱をかけて、それでもって伯父さんを引き回すでしょう。一日に十回は愛してるかつて訊いてきて、出掛けようと立ち上がる度に、無理にでももつといさせようと大騒ぎするでしょうね。帽子をかぶる度に、次に訪ねて来る正確な時間をはつきりさせられますね。

バーロー だが、女はみんなそうするものだ。こちらを好きだつていう証拠にすぎん。

ディツキー ええ、女はみんなそうするでしょうね——ペン以外は。ペンは決しているさいことを言いません。愛してるかなんて訊かないし。出掛けたい時に引き留めません。こちらの行動を全部知りたいなんて言い張りませんから。それに、こちらが出て行く時に、「何時に帰るの？」なんてろくでもない不快な質問はしませんよ。

バーロー そりゃ、君、妻がそれだけわしに無関心だったら、相手の男は誰かなつて自問するだろうね。

ディツキー 一体それはどういうことですか？

バーロー なあ、ディツキー、無理な要求をするのは女の性なんだよ。女が恋すると、決まって小うるさくなるんだ。わしが思うに、とても魅力的な小うるささでもあるがね。わしは好きだよ。

ディツキー 伯父さんがおっしゃっているのは、まさかペネロペが……。

バーロー なあ、君、わしが話しに来たのはペネロペのことではなくて、わしの健康のことなんだぞ。

ディツキー 「苛立って」ああ、伯父さんは慢性の肥満症にかかっています。それだけのことで。

バーロー 驚いたな、随分大事に聞こえるが。それで、わしはどうすればいいのかね？

ディッキー 「荒っぽく、早口で」やめなさい。ワイン、スピリッツにリキュール、パン、バター、ミルク、クリーム、シュガー、ポテト、キャロット、カリフラワー、エンドウ、カブ、ライス、サゴ、タピオカ、マカロニ、ジャム、ハチミツ、それにマーマレードも。

バーロー だが、それじゃ治療ならん、死んでしまう！

ディッキー 「注意を払わずに」毎日常食の前に、セーターを着て公園の回りを走りなさい。さあ、肝臓を診てみましょう。

バーロー だが、なあ、ディッキー……。

ディッキー ソファアに横になって。さあ、おとなしくして。殺そうっていうんじゃありませんから。「バーローは横になる。」膝を上げて。

バーロー 「ディッキーに肝臓を触診されながら」彼女は人目を引くいい女でな。その点は間違いない。

ディッキー 楽にして。人目を引くいい女って誰なんですか？

バーロー ファーガソン夫人だよ。

ディッキーはびくつとする。バーローをちらつと見、口を開けて歩き去る。

バーロー ディッキー、ディッキー。

バーローは非常に不安になってソファアから降りる。

バーロー わしの肝臓はそんなに悪いのか？

ディッキー 「完全に途方に暮れて」ひどい状態だ。こうなるだろうと思っていたんだ。

バーロー 「悲劇的な口調で」リチャード、どんなに悪いことでもすぐに言ってくれ。

ディッキー 「苛立って」そんな馬鹿なこと言わないで。あなたの肝臓は僕のと同じくらい大丈夫ですから。贅沢しすぎて十分な運動をしていないこと以外、伯父さんに悪いところはありません。

バーロー 「嬉しそうに」よく食事に招かれる人間の中で、当節一番の人気者となると、後で痛い目に遭わなきゃならんだろうな。

ディッキー 「バーローをとげとげしく見ながら」伯父さんがいささか感銘を与えた相手というのは、ファーガソン夫人なんですか？

バーロー 「大いに自惚れて」なあ、君、わしは最も女の正体を明かさなない男なんだが。

ディッキー 全く！

バーロー ここだけの話だが、ディッキー、わしがファーガソン夫人にカールトンで二人だけで昼食を食べようと誘ったら、彼女は変だと思っかな？

ディッキー 変だなんて！ 飛びつくでしょうよ。

バーロー 彼女のご亭主は気にするかな？

ディッキー ああ、彼女のご亭主なら大丈夫です。引き続き外地で祖国のために勇敢に仕えていますから。

バーロー さっきのは彼女が優しい性格の人だという証拠だ。でなければ、君と一緒にパリに行っても構わないかなんて、ペネロペに訊きに来たりしなかっただろうからな。

ディッキー ええ、彼女は素敵な性格の人です。

バーロー 運のいい奴だ、わしが彼女と一緒にパリに行くんだっただらなあ。

ディッキー 「熱を込めて」そうだったらよかつたんですが。

バーロー ハハハ。さて、さて、急いで行かなければ。いつものように外で食事をするんだ。公爵夫人たちときたら、わしを放っておいてくれんのだから。さようなら。

バーローは出て行く。ディッキーは考え事をしながら部屋を行ったり来たりする。すぐに、ペネロペが顔を出す。

ペネロペ ねえ、あなた、荷造りはしなくていいの？

ディッキー 入っておいで。一緒にタバコを吸おうよ。

ペネロペ いいわ。

ペネロペはタバコを手に取り、ディッキーが火をつける。

ペネロペ パリで素敵な時間を過ごせるといいわね。

ペネロペは座る。

ディッキー 君は前みたいに僕の椅子の肘掛けに絶対座らないね。

ペネロペ とても残念だけど、わたしも中年になってきたわ。自分の椅子を持った方がどんなに快適かって気がついたのよ。

ディッキー 「かすかな困惑を隠そうとしながら」ファーガソン夫人が今夜パリに行くって言った時、君は全然驚かなかったの？

ペネロペ 驚くですって？

ペネロペはちよつと喉を鳴らし、抑えようとするが抑えきれず、あきらめて、どつと声を轟かせて笑い出す。ディッキーは驚きをつのらせながら見守る。

ディッキー 一体何を笑っているの？

ペネロペ 「はしやぎながら」あなただったら、わたしのことを馬鹿なオバサンだと思っているのね。もちろん、あなたが一緒に行くのは分かっていたわ。

ディッキー 「すっかり驚いて」何のことを言ってるのか分からないな。

ペネロペ わたしは何も見ないようにしてきたけど、あなたがそれを難しくするのよ。
ディツキー 「意を決して非常にえらそうに」自分から説明するくらいの親切心がある。でもいいだろ。

ペネロペ あなただったら、もちろん、わたしは全部知ってるのよ。

ディツキー 君の言ってることが全く分からないよ。何を全部知ってるんだ？

ペネロペ あなたとエイダのことよ、馬鹿ね。

ディツキー 「実にえらそうに」ペネロペ、僕を疑ってると言うんじゃない？

ペネロペ 「愛情のこもったほほえみを浮かべて」あなただったら！

ディツキー 「急に不安になって」何を知っているの？

ペネロペ 全部よ。

ディツキー ははっと息をのみ、不安げにペネロペを見る。

ペネロペ この二か月、あなたを見ていても面白かったわ。

ディツキー 面白かったって？

ペネロペ 何とも、芝居を観ているのと同じくらい面白かったわ。

ディツキー 「完全に度を失って」初めから知っていたの？

ペネロペ あなただったら、わたしのやったことが、すべてあなたたちを偶然のように
会わせるためだったことが分からなかったの？

ディツキー でも、それは全くの嘘だ。

ペネロペ 「機嫌良く」まあ、まあ、ディツキーったら！

ディツキー でも、どうして何も言わなかったの？

ペネロペ あなたを困らせるだけだろうと思っただよ。今日は何も言うつもりはな
かったけど、わたしが驚いたかって訊かれた時には、笑わない訳にはい
かなかったわ。

ディツキー 怒ってないの？

ペネロペ 怒るですって？ 何を？

ディツキー 妬いてないの？

ペネロペ 妬くですって？ わたしのことを馬鹿だと思ってるのね。

ディツキー 当然のことだと思ってるの？ 面白かったって？ 芝居を観ているの
と同じくらい？

ペネロペ あなた、わたしたちは結婚して五年になるのよ。今更、わたしたちの間に
何かが存在し得ると考えるなんて馬鹿馬鹿しいわ。

ディツキー おや、そうなの？ そうとは知らなかったよ。

ペネロペ わたしにはすべてのことが取るに足らなく思えたの。あなたが幸せだと思
うと嬉しかったわ。

ディツキー 「かっとなって」ええっ、全く不名誉なことだよ、ペネロペ。

ペネロペ まあ、あなた、大げさに言わないで。害のないちよっとした過ちなんで
すから。

ディツキー 僕が話しているのは、僕のやったことではなくて、君のやったことだよ。

ペネロペ わたしのですって？

ディッキー ああ、とにかく、外聞の悪いことだよ。

ペネロペ 「すっかり失望して」わたしは如才なくやっているとと思ってたわ。

ディッキー 如才なくなるとは糞食らえだ。君には品位を保つという感覚が全く欠けているに違いない。

ペネロペ あなた、わたしは何もしなかったわ。

ディッキー 正にそこだよ。君は何かをするべきだった。大騒ぎしてひと悶着起こすべきだったし、僕と離婚するべきだったんだ。なのに、何でもないかのうにそこに座ってそのままにしていただけだった！ ひどすぎるよ。

ペネロペ とつても申し訳なく思うわ。大騒ぎするのがお望みだと知っていたら、もちろんそうしたわよ。でも、本当に、騒ぐ価値があるとは思えなかったものだから。

ディッキー 僕は聞いたことがないよ。そんなに思いやりがなくて、冷酷で、意地の悪いことは。

ペネロペ あなたを喜ばせるのは難しいのね。

ディッキー でも、僕が君にひどい扱いをしたってことが分からないのかい？

ペネロペ あら、そんな、あなたは常に最善かつ最も分別のある夫だったわ。

ディッキー いや、僕は悪い夫だった。僕は十分にそれが分かる男だ。だから、僕は心を入れ替えるつもりだよ、ペネロペ。エイダとは手を切るつもりだ。彼女とは二度と会わないと約束するよ。

ペネロペ あなた、どうしてあなたが彼女に不要な苦勞をかけなければいけないの？ 何といっても、彼女はわたしの昔からの友達なのよ。あなたが彼女に優しく接してれることくらいはわたしが期待してもいいと思うの。

ディッキー それを続けてほしいって言うの？

ペネロペ それがわたしたち三人みんなにちょうどいいやり方なのよ。あなたは楽しいし、エイダには連れ回してくれる人がいるし、わたしは新しいフロックがたくさん手に入るんですもの。

ディッキー フロックだって？

ペネロペ ええ、あのね、わたしはダンスをいっぱいにすることで痛む心を慰めてきたのよ。

ディッキー それで、君は自分のフロックのために僕たちの幸せを全部犠牲にしても構わないんだ。ああ、僕が大事にしていたのは恩をあだで返す人だったんだ。僕の行動は全く獣みたいだったかもしれないけど、いまいいことに、僕だって何が正しくて何が間違っているかくらいは知っているんだ。僕には道徳観念があるからね。

ペネロペ 道徳観念がユーモアのセンスに取って代わったみたいね。

ディッキー この何週間かずっと、僕が良心の呵責にさいなまれていたのを知ってるかい？ 君にひどい扱いをしていると毎日自分に言い聞かせて、片時も幸せじゃなかった。完全に苦しみの中で生きていたんだ。

ペネロペ それでも、あなたの健康に深刻な影響は与えなかったみたいね。

ディッキー それなのに、ここで君はずっとほくそえんでいたんだね。こんなことは続けられないよ。

ペネロペ びっくりだわ、どうして駄目なのか分からない。
ディッキー 僕たちはお互いを誤解していたんだ。僕は平気でああいう立場に立つ男じゃない。それに、僕も君を誤解していたんだ、ペネロペ。君は僕のことを好きなんだと思ってたよ。

ペネロペ わたしはあなたが大好きよ。

ディッキー ああするのがそれを示す素晴らしい方法なんだ。

ペネロペ ああするのが正にそれだと思ったの。

ディッキー 君は僕の良心をすっかり踏みにじってしまったんだよ。

ペネロペ それで、どうするつもりなの？

ディッキー 唯一できることをするつもりだ。別居してくれ。

ペネロペ 「玄関の声を聞きながら」パパとママが来たわ。戻って来るって言ってたの。

ディッキー 君がどれだけ意地悪で冷酷な女なのか、お二人に分かることを願うよ。そんなことにでもなったら、悲しみに白髪になってお墓に行くことになるだろうからね。

ペネロペ でも、あなた、二人とも全部知ってるのよ。

ディッキー 何だって！ 知らない人間はいないのか？

ペネロペ ダベンポート伯父様には話してないわ。伯父様はとても世慣れた方だけど、ユーモアのセンスがないんですもの。

ペイトンが入って来て、ゴーライトリー夫妻の来訪を告げてから出て行く。

ペイトン ゴーライトリー博士と奥様です。

ゴーライトリー夫妻が入って来る。

ペネロペ 「ゴーライトリー夫人にキスしながら」まあ、お母様……。パパ、わたしが離婚しないから、ディッキーは別居したいんですって。

ゴーライトリー あまり論理的には聞こえないが。

ゴーライトリー夫人 何があったの？

ペネロペ 何もなかったわ。ディッキーがなぜそんなに怒っているのか、わたしには理解できないの。

ディッキー 「憤然として」何もなかっただって！

ペネロペ わたしは何も言うつもりはなかったんだけど、わたしたちがディッキーの不倫について全部知っていることを知られてしまったわ。

ゴーライトリー お前、何てへまなことを！ 男はそういうことを妻には隠しておきたいものなのに。

ディッキー ペネロペがどんな態度を取ったか分かりますか？

ゴーライトリー 大騒ぎはしなかったんだろ？

ディッキー 正にそこです。感受性のある女なら、誰だって大騒ぎするでしょう。彼

女には何か根本的に狂っているところがあるに違いありません。そうでなければ、涙を流して、地団駄を踏んで、髪の毛をかきむしったでしょう。

ゴーライトリー 「穏やかに」ああ、ねえ君、君は自分の罪の重さを大げさに言っていないか？

ディッキー 僕には弁解の余地がありません。

ゴーライトリー あんなことは取るに足らないことだ。ペネロペが深刻に受け止めたなら、嘆かわしいことにこの子にはユーモアが欠けているということだろうね。

ディッキー お父さんはペネロペと同じ考えだっておっしゃるんですか？

ゴーライトリー ねえ君、我々は二十世紀にいるんだよ。

ディッキー ああ！ ゴーライトリー夫人、あなたは異教徒を改宗させることに時間を費やしていらっしやいます。少しはご自分の家族に注意を払う必要があると思いませんか？

ペネロペはディッキーに見られずにゴーライトリー夫人に顔をしかめて見せて、その場を継続させようとする。

ゴーライトリー夫人 未開の人種を長いこと知っているから、わたしは男は生まれつき一夫多妻の動物だという結論に達したの。

ディッキー めまいがする。

ゴーライトリー夫人 実を言うと、相手が人妻だって聞いて安心したの。その方がずっと恥ずかしいことじやなくなるみたいだから。

ディッキー ここでは僕だけが道徳をわきまえた人間みたいだ。

ペネロペ ディッキー、あなた、わたしは道徳をわきまえた警官とだって関係を持たないできたわ。

ディッキー 持てばよかったのに。そうすれば、僕がこんなふうに君を扱うことにはならなかっただろう。

ペネロペ そう思っただけで、口髭の色が好きじゃなかったのよ。

ディッキー 僕が責められるべきなのは分かっている。完全に獣みたいに振る舞ったんだから。

ペネロペ あら、馬鹿な。

ディッキー 否定しないでくれ、ペネロペ。僕は完全に自分を恥じているんだ。

ゴーライトリー まあ、まあ！

ディッキー もう一度言いますけど、僕に弁解の余地はありません。

ゴーライトリー夫人 かわいそうな人、すっかり傷ついているみたい。

ディッキー 僕に正当化できる根拠はありません。でも、誓って、道徳観念はありますから、僕が非常に憤慨していることをあなたたちみんなにお伝えします。

「あなたたちは社会の基礎を打ち壊しています。たとえ僕が何をやったにしろ、あなたたちを全部合わせたよりもずっと家庭の神聖さと家族の品位を尊重します。」

ディッキーはドアに向かって突進し、立ち止まって振り返り、みんなに向かって拳を振り上げる。

ディッキー 道徳観念。僕にはそれがあります。

ディッキーは後ろ手にドアをボタンと閉めて出て行く。

ペネロペ 「笑って」 かわいいそうな人。

ゴーライトリー 一体どうしてお前は全部しゃべってしまったんだ？

ペネロペ 彼女が今日ここに来て、彼が彼女にうんざりしているのが分かったの……。ママ、ママの態度はロマンスのヒロインみたいだったわ。

ゴーライトリー夫人 お前がわたしに言わせた恐ろしいことを考えると、わたしは自分ですせないわ。

ペネロペ あら、そんな、許せるわ、お母様。次の四旬節の間に一日余計に断食なさい。そうすれば、心にも体にも同じようにいいから。

ゴーライトリー夫人 ペネロペったら！

ペネロペ 「ゴーライトリーに向かって」わたし、その時が来たって、突然思ったのよ。

ゴーライトリー 静かに。

ディッキーが荒々しく部屋に躍り込んで来る。

ディッキー おい、玄關にいるあの二人の女は何をしているんだ？

ペネロペ どんな人たち？ ああ、分かった……。『ペネロペはドアのところへ行く。』どうぞ入って。フランソワーズのところから来たんだわ。帽子屋さんよ。

店員たちが帽子の箱をたくさん持って入って来る。

ペネロペ あなたがパリに旅行する気休めとして、わたしが帽子を一つ、二つ買ってもいいって、言ってくれたわね。

ゴーライトリー 何て優しいんだ、ディッキー。君が利己的な性格じゃない証拠だ。

ペネロペはまたゴーライトリー夫人に顔をしかめて見せる。

ゴーライトリー夫人 あなたはわたしに自由に帽子を買わせてくれたことがなかったわね、チャールズ。

ゴーライトリー その代わり、パリに旅行する時はいつも一緒だったよね、君。
ゴーライトリー夫人 夫のことで運のいい女もいるのね。

その間に店員たちは帽子を取り出し出していて、ペネロペが一つをかぶる。ペネロペはすっかり大喜びである。

ペネロペ ああ、これは夢じゃないの？「ほかのを見ながら」あら！ まあ！ こんな素敵なの見たことある？ デイツキー、あなたっていい人ね。あなたがパリに行ってくれてよかったわ。

デイツキー 「激しい口調で」パリには行かないよ。
ペネロペ 何ですって！

デイツキー この帽子は全部持って帰ってくれ。
ペネロペ でも、マック夫人のことは？

デイツキー マック夫人なんか糞食らえだ。

デイツキーは電話機をつかむ。

デイツキー もしもし。ジェラードの一二三四番に。ファーガソン夫人宛てだ。マック夫人の病気がぶり返した。よって、今夜はパリに行けない。そう伝えてくれ。

第二幕終わり

第三幕

ペネロペの私室。明るい色のチンツ（光沢のある平織り綿布）のカバーが掛かった家具が備え付けられている魅力的な部屋で、秋の花々とふさふさとした葉の茂みが置いてあって華やかである。大きな姿見がある。生活するための部屋の、本と雑誌が散らかっている。思いつくかぎりのポーズのディッキーの写真が置いてある。

魅惑的な服装のペネロペが独りだけで部屋の真ん中に立っている。姿見に映った自分の姿を見て、満足気にはほえみながらぐるっと後ろを振り向く。得意気である。ふと、今一つ気に入っていないことに気づく。ちよっと眉をひそめてから、鏡に映っている自分に向かって妙な顔をして見せ、うやうやしく念を入れて膝を曲げ体がかがめてお辞儀をし、陽気に投げキッスをする。

ペイトンが入って来て、ゴーライトリー夫妻が続く。

ペイトン　ゴーライトリー博士ご夫妻です。

ペネロペ　「腕を差し伸ばして」ああ、聖人のお母様！

ゴーライトリー夫人　「息を切らせて」こんなにかくさん階段を上ったのは初めてよ。

ペネロペ　誰も邪魔しに来ないように、ここまで上がってもらおうペイトンに言うておいたの。「芝居がかった身振りをして」高貴なお父様！

ゴーライトリー　わが子よ！

ゴーライトリー夫人　馬鹿なまねしないで、ペン。

ペネロペ　座って、ママ、そして呼吸を整えて、もう一度息もつけないようにしてあげるんだから。

ゴーライトリー夫人　それじゃ、やってもほとんど無駄みたいね。

ペネロペ　ディッキーはわたしのことが大好きなの。

ゴーライトリー夫人　それだけ？

ペネロペ　でも、それはこの世で一番の驚くべき素晴らしい素敵なこと、わたしは嬉しくって天にも昇る気持ちなの。

ゴーライトリー　でも、彼にそう言われたのかね？

ペネロペ　あら、違うわ、今は言葉を交わすような仲じゃないもの。

ゴーライトリー　ほう、お前たちは身振りだけでお互いの愛情を表現するんだ。

ペネロペ　昨日の夜、彼はお父様たちが帰ったあとすぐに掛けて、十二時過ぎまで帰宅しなかったの。彼がわたしの部屋のドアのところ立ち止まるのが聞こえたから、わたしはの布団の中で縮こまって、ぐっすり眠っているふりをしたんだけど、うっかりしてちよっと片手をベッドの片側に垂らしていたわ。すると、彼はほんのちよっとノックしたけど、わたしが応じなかつ

たものだから、部屋に入って抜き足差し足で忍び寄って来て、わたしを見たの。まるで——まるで、わたしを食べてしまいたいみたいに。

ゴーライトリー ペネロペ、お前はありもしないことを言っている。一体どうして分かったんだ？

ペネロペ 「指で頭の後ろを差しながら」わたしは頭の後ろを通して彼を見たの——ここよ。で、それから彼は腰をかがめてちよつと唇でわたしの手に触れたの。「ゴーライトリーに自分の手を見せながら」見て、ここに彼がキスしたの——ちようど指の付け根のところよ。

ゴーライトリー 「真剣にペネロペの手を見ながら」跡は残っていないみたいだね。ペネロペ 馬鹿なこと言わないで。で、それから彼はまたそつと忍び足で出て行って、わたしはこの一月で初めて本当にぐつすり眠ったの。そして、今朝わたしがベッドで朝食を取って起きてみると、彼は出掛けてしまっていたわ。

ゴーライトリー夫人 今日は彼に全然会ってないの？

ペネロペ ええ、彼は昼食にも戻らなかつたから。

ゴーライトリー夫人 やれやれ、チャールズ、あなたは決して、わたしを意図的に避けることでわたしに対する情熱を示したりしなかつたから、感謝するわ。

ペネロペ でも、お母様、とても簡単なことなのよ。もちろん、彼はひどく怒っているわ。わたしは彼が完全な馬鹿だと思うようにさせたから、彼は憎んでいるわ。でも、ありがたいことに！ 五年も経つと、彼のプライドを傷つけた時、彼をどう扱えばいいか分かるの。わたしがちよつと彼の顔が立つチャンスを上げれば、わたしたちはお互いに抱き合っつていつまでも幸せになれるのよ。

ゴーライトリーは、テーブルの側に座っていたが、自分の方に一枚の紙を引き寄せて、考え込むようにして書き始める。

ゴーライトリー夫人 でも、お前、貴重な時間を無駄にしないで、すぐにやりなさいよ。

ペネロペ いいえ、わたしはそんな馬鹿じゃないわ。エイダ・ファーガソンが捨てられるまで、わたしは何もしないつもりよ。

ゴーライトリー夫人 彼女のこと何か分かつたの？

ペネロペ いいえ、でも、彼女がここに来るのを今か今かと待っているの。

ゴーライトリー夫人 「あえぎながら」ここにですって？

ペネロペ 彼女が昨日の夜電話してきて言ったの「男の口調をまねしながら」太い声で、こんなふうには、彼女だと分からないように。ディッキーは家にいるかって訊くから、いないって答えたわ。「また男の口調をまねしながら」「彼が帰ったらすぐ、マック夫人に電話するように言っただけませんか？」わたしは「あら！ 夜はずつとマック夫人のところにいると思えますわ」って言って、すぐに電話を切つたの。そして、今朝は受話器を外してあるから、今頃エイダはご機嫌斜めに違いないと思うわ。

ペネロペはゴーライトリーを目に留めると、近寄って行って何を書いているのか見る。

ペネロペ 「手のひらでテーブルを鋭く叩きながら」二足す二は五にはならないわよ、お父様。

ゴーライトリー そうなるとは言わなかったよ、お前。

ペネロペ それなら、どうしてそう書いているの？

ゴーライトリー お前はそうなると思っっているみたいだからね。お前の知性には最高の敬意を払うがね。

ペネロペ ママ、子供に父親を提供することが絶対必要なことだと思うなら、ここまですらいらさせない人を選んでほしかったわ。

ゴーライトリーは答えずに、おとなしく二と二を足す。ペネロペはちよつとの間ゴーライトリーを見つめる。

ペネロペ わたしが完全な馬鹿だと思ってるの、お父様？

ゴーライトリー そうだよ、お前。

ペネロペ どうして？

ゴーライトリー お前がまたしても彼のためにイチゴアイス療法を続けようとしているからだよ。

ペネロペは父親のところ近くに近寄って行き、父親と向かい合って座る。

ペネロペは父親の手から鉛筆を取り上げる。

ペネロペ これは下に置いて、お父様、何のことを言ってるのか教えてちょうだい。

ゴーライトリー 「両手を組んで上体をそらして椅子に座りながら」お前は夫の愛を取り戻した訳だが、どうやってそれを保ち続けるつもりかね？

ペネロペ 「うなずき、ほほえんで」愛情を表すことで彼をうんざりさせない。わたしを愛してるかなんて訊かない。そして、彼が出掛ける時に、何時に帰るかなんて訊かないわ。

ゴーライトリー 「穏やかに」で、また夫不在のかわいい女が彼の頭めがけて身を投げてきたら、どうするつもりかね？

ペネロペ 「それを考えただけでもかなり憤慨して」彼には頭をひょいと下げてさっと身をかわしてもらいたいわ。

ゴーライトリー 「反論するように肩をすくめて」お前のお母さんは異教徒の連中を誰よりもよく知っているから、お前に男は生まれつき一夫多妻の動物だと言ったんだ。

ゴーライトリー夫人 わたしは決して自分を許せないわ。

ペネロペ お父様は、わたしにディッキーが半ダースの違う女たちと浮気すると思えておっしゃるの？

ゴーライトリー それを避ける方法は一つしかないと思う。

ペネロペ で、それにはどうすればいいの？

ゴーライトリー お前が半ダースの違う女になるんだよ。

ペネロペ ひどく疲れそうね。

ゴーライトリー 男は生まれつきハンターだということ覚えておきなさい。だが、お前が始終彼の腕に身を投げ出していたら、一体どうやって彼は獲物を追えるかな？ 家で飼っているめんどりでさえ正式な夫をはらはらせるというのに。

ペネロペは視線を父親から母親へと移す。ペネロペは小さいため息をつく。

ペネロペ わたしにとって、彼を愛し、尊敬し、従うことはとても簡単なことで、とても楽しいことなの。自分の感情に注意していなければならぬなんて思っても寄らなかつたわ。

ゴーライトリー わたしたちはみんな幸福を得ようと努力するけど、幸福が貧乏な親戚みたいにわたしたちにくつついて離れなかつたら、幸福はどうなるだろうか？

ペネロペ 「うなずきながら」朝食にイチゴのアイス、昼食にイチゴのアイス、そしてお茶にイチゴのアイスね。

ゴーライトリー 壁にレンブラントを掛けてごらん、一週間のうちにちらっとも見ないで通り過ぎるようになるから。

ペネロペ 「反論するように両手を差し出して」パパ、例えでわたしをいためつけないで。

ゴーライトリー 「にっこりして」お前は自分の愛を安売りしすぎた。夫がお前の愛を懇願するようにさせるべきだったのに、ありふれすぎて価値のないものにしてしまったんだよ。宝は小出しにしなさい。自ら毎日新たに襲撃されなければならぬ要塞になりなさい。お前の心がすっかりつかまえられていることを、夫に知られないようにしなさい。お前の心に底には手の届かないほど高価な宝石があると、夫はいつも思うに違いない。

ペネロペ 常に警戒していなければいけないっておっしゃるの？

ゴーライトリー 賢い女は自分に対する確固たる自信を夫には持たせないものだ。そうだったとたんに——「肩をすくめて」——キューピッドはシルクハットをかぶって、教区委員になつてしまふんだから。

ペネロペ 「声をからして」そうすることにそれほど価値があるの？

ゴーライトリー それはお前にしか答えられない質問だ。

ペネロペ わたしがどれだけディッキーを愛しているかにかかっているとおっしゃりたいのね。「間。震えながら」わたしは心から彼を愛しているから、彼の愛

を保ち続けることができるなら、何だつてやってみる価値はあるわ。「両手で顔をおおい、まっすぐ正面を見る。声は涙ぐんでいる。」でも、ああ、お父様、知恵とか分別とかを考えることなく愛し合っていた最初の頃に、どうして戻れないのかしら？ あれは本当の愛だった。どうしてそれが続かなかったの？

ゴーライトリー 「優しく」それは、お前とディッキーが男と女だからだよ、お前。

ペネロペ 「それまでの元気を取り戻して」でも、わたしのお友達にも夫がいるけど、その夫たちは出会うかわいい女全部といちゃついたりしないわ。

ゴーライトリー 究極の選択だ。その夫たちが払う犠牲は飽き飽きすることだ。お前は十組の夫婦のうち九組の夫婦のように無関心で波乱のないのを取るのか、それとも、少しばかりの面倒という代償を払い、少しばかりの常識を犠牲にしても、ディッキーが一生懸命にお前を愛するようにしておきたいのか？

ペネロペ 「いたずらっぽく目を輝かせて」パパとママにはお互いに死ぬほどんざりしているという兆候が見えないわね。

ゴーライトリー お前の聖人のお母さんは二十年の間わたしに一貫して貞節ではなかったからね。

ゴーライトリー夫人 チャールズだったら！

ゴーライトリー お母さんは「特別副牧師協会」と浮気して、「イギリス国教会伝道団」と密通した。お母さんは「キリスト教科学」といちゃいちゃして、「ホメオパシー（治療対象とする疾患と同様な症状を健康人に起こさせる薬物をごく少量投与する治療法）」に色目を使って、お母さんの容姿には「菜食主義」と関係を持った跡がはつきりと残っている。そんなに墮落した女を大好きになるのを、わたしはどうして抑えることができただろうか？

ゴーライトリー夫人 「上機嫌で」自分は何年も代数記号のハーレムを指揮してきたのに、チャールズ、わたしをとがめるなんてひどいわ。

ペネロペ 「ぞっとしたふりをして両手を差し上げながら」自分の両親がどれだけ不道徳か知らなかったなんてねえ！

ゴーライトリー 「妻の手を軽くたたきながら」わたしたちは幸運な人間に違いないと思うね、お前。結婚して二十年になるんだから。

ペネロペ 「遮って」四半世紀だと言つてよ、お父様。わたしが生まれてから二十四年以下ということは、実際あり得ないもの。

ゴーライトリー 「妻に向かって」わたしたちはしごく円満にやってきたって思えるよね？

ゴーライトリー夫人 「愛情を込めて」あなたはとてもよくしてくれたわ、あなた。

ゴーライトリー わたしたちは共に丘を登ってきて……。

ペネロペ シーツ！ シーツ！ シーツ！ 目の前で両親をいちゃつかせておく訳にはいかないわ。そんなの聞いたことがない。

ゴーライトリー お詫びするよ。

ペネロペ 「音がするのを聞きながら」聞いて。ディッキーだわ。お父様、早く言うて——彼が常にわたしを愛するようにするには、どうしなければいけないの？

ゴーライトリー 要するに、彼にひどい生活を送らせるのさ。

ペネロペ 「哀れっぽく」彼の腕に飛び込んでみじめな過去を忘れることをわたしがどれだけ望んでいるか、分かってさえもらえたら！

ゴーライトリー よしなさい。そして、お前は自動車旅行に出掛けるんだって、彼に言いなさい。

ペネロペ 「沈んだ顔つきで」もし彼がわたしを行かせたら？

ゴーライトリー なあ、慈悲深い神の摂理がお前にいたずらっぽい目と辛辣な口を与えたんだ。それを使いなさい。

ゴーライトリー夫人 チャールズ、あなたが数学に戻ってくれるとありがたいわ。あの浮気女Xのモラルはどうにかかなりひどいから、あなたがもっと悪くするのは無理でしょうけど。

ペネロペ 実を言うと、パパ、若い人たち向けのガイドとしては、パパの見方はかなり進歩的なよね。

ゴーライトリー 「こっけいな、芝居がかった仰々しい身振りで」恩知らずな子だ！わたしは、ペリカンのように、お前が食べるようにと自分の心臓そのものを提供したんだぞ。

ディッキーが入って来る。ちよつとまごついて、ばつが悪そうである。

ディッキー 入ってもいいかな？

ペネロペ ええ、どうぞ！

ディッキー 「ゴーライトリー夫妻に会釈しながら」こんにちは。

ゴーライトリー 「妻に向かって」もういいかな？

ゴーライトリー夫人 「立ち上がりながら」ええ。

ディッキー わたしが追い出している訳じゃないでしょうね。

ゴーライトリー いや、そんな、ペネロペにさようならを言うために十分ほど寄っただけなんだ。

ディッキーはこの言葉にかなり当惑して、ペネロペを素早く見る。

ディッキー 君は……？「言いよどむ」

ゴーライトリー 楽しくやるんだよ、お前。

ペネロペ ええ、そうするわ。

ゴーライトリー夫人 さようなら、お前。

ペネロペ 「母親にキスしながら」さようなら。

ペネロペは呼び鈴のところまで行って鳴らす。

ゴーライトリー 出口は分かるから。ペイトンは呼ばなくていいよ。

ペネロペ 彼女に話しをしたいのよ。

ゴーライトリー ああ、分かった。「ディッキーに会釈しながら」さようなら。

ゴーライトリー 夫妻は出て行く。ペネロペはかすかにほほえんでソファーに横になり、雑誌を手に取る。ペネロペはディッキーに全く注意を払わない。ディッキーは横目でペネロペを見て、鏡でネクタイを整える。ペイトンが入ってくる。

ペネロペ

「雑誌から目を上げながら」ああ、ペイトン、あのお医者様用の小さくて平らな旅行鞆にわたしのものをいくつかつめてもらえないかしら。グリーンのシャルムーズ（しゅすに似た絹織物）も入れておいてね。

ペイトン

かしこまりました、奥様。

ペネロペ

半時間以内にタクシーを呼んでね。

ペイトン

かしこまりました、奥様。

出て行く。

ディッキー 出掛けるの？

ペネロペ ええ、そうよ、言わなかったかしら？

ディッキー 「固まって」いいや。

ペネロペ

わたしたったら、何て馬鹿なんでしょう！ あのね、あなたがエイダとパリで二、三日過ごすと思っていたものだから、わたしはヘンダーソン夫妻と車でコーンウォールに行くことにしたの。

ディッキー

でも、君を不快な思いをさせないように、僕はパリへの旅行をやめたんだよ。

ペネロペ

「ほほえみながら」わたしはちっとも不快になんか思わなかったのに、あなた。

ディッキー

不快に思ったに決まっているよ。

ペネロペ

いずれにしても、ヘンダーソン夫妻を見捨てることはできないと思うの。夜ブリッジができるように、男女二人ずつの四人組を決めてしまっているんですもの。

ディッキーはペンのところに寄って行き、ソファーのペンの側に座る。

ディッキー なあ、ペン、仲直りしようよ。

ペネロペ

「楽しそうに」でも、わたしたち、喧嘩なんかしてなかったでしょ？

ディッキー 「にっこりして」君の手を握りたいのか、抱きしめたいのか、分からないくてね。

ペネロペ そうね、わたしがあなたならどっちもしないわ。

ディッキー 「ペネロペの両手を取って」ペン、僕は真面目に話したいんだ。

ペネロペ 「両手を振りほどきながら、時計を見て」時間はあるの？

ディッキー 一体何のこと？

ペネロペ いつもなら、今頃マック夫人のところへ出掛けるわ。

ディッキーは立ち上がって、部屋を行ったり来たりする。

ディッキー 「断固として」マック夫人は死んだんだ。

ペネロペ 「ソファアから跳び降りながら」死んだですって！ お葬式はいつなの？

ディッキー 日にちはまだ決まっていないんだ。

ペネロペ それじゃ、もう請求書を出せるわね。

ディッキー 「恐る恐る」ペン、マック夫人なんていなかったんだ。

ペネロペ 「にっこりして」わたしもいるなんて思ってたわ、あなた。

ディッキー 何だって！「ペネロペはくすくす笑う」僕が彼女をでっちあげたこと、君はずっと知ってたって言うの？

ペネロペ あんなによく出掛けるもつともらしい口実をでっちあげてくれるなんて、あなたつとでも親切だなんて思った。

ディッキー それなら、僕が大金を稼いでいるからといって君があんなにもものを買ったのは、僕をからかっていただけなんだ。

ペネロペ 「にっこりして」それは……。

ディッキーは突然大笑いを始める。

ディッキー ねえ、君は僕たちの上を行ってたんだね。全く、君は素晴らしい女だよ。

どうして今までエイダ・ファーガソンの中にかかを見出していたのか思い出せないくらいだ。

ペネロペ あら、でも、彼女は魅力的だと思うわ。

ディッキー そんな馬鹿な！ 思っていないせに。彼女が僕に送らせた生活を君が知ってさえいたら！

ペネロペ 彼女を本当に愛してるかって何度も訊かれたんですよ？

ディッキー 一日に十回もね。

ペネロペ そして、あなたが彼女を置いて出掛ける時は、何時に戻るのか正確に知ってたがったんでしょ？

ディッキー どうして分かるの？

ペネロペ そうじゃないかと思っただけ。

ディッキー 「ペネロペを両腕に抱こうとするかのように向かって行きながら」ああ、ペン、今までのことは水に流して許してくれよ。

ペネロペ 「ディッキーの行く手からどきながら」許すことなんか何もないわ、あなただ。

ディッキー 「ペネロペの方へ歩を進ませながら」君は僕が屈辱を受けるのを望んでいるんだろ……。僕の振る舞いは全く獣みたいだった。本当に申し訳ないと思っっているし、もう二度としないよ。

ペネロペ 「わざとではないかのようにディッキーから身をかわしながら」多分、せっかくの骨折れも割に合わないということね。

ディッキー 「ペネロペの行く手を遮ろうとしながら」そのことは言わないで。

ペネロペ 「ディッキーの手の届かない位置を保ちながら」あなたは随分楽しい時を過ごしていたと思うの。

ディッキー 僕はひどく良心の呵責を感じていたんだ。

ペネロペ そこが、女には男に勝る大なる利点があるところなのよ。体の線がくずれて顔のつやがなくなるまで、良心が女を苦しめることはないもの。

ディッキー 「立ち止まりながら」ねえ、君は何のためにそんな馬鹿みたいに部屋を走り回っているんだ？

ペネロペ わたしたちは鬼ごっこをやっているんだと思ってた。

ディッキー 意地悪しないで、ペン。君は、自分が僕を愛していて、僕が君を完全に溺愛しているのを分かっているくせに……。僕はもう今まで以上のことはできないよ。

ペネロペ あなたはわたしにどうしてほしいの？

ディッキー キスして仲直りしてほしいんだ。

ペネロペ 「実に愛想よく」ちょっとせっかちすぎない？

ディッキー エイダ・ファーガソンのことを考えているんだろ。

ペネロペ 正直なところ、彼女のことをわたしの心から完全に消えた訳じゃないわ。

ディッキー エイダ・ファーガソンなんか絞首刑だ！

ペネロペ それは随分思い切った罰だと思っわ。結局のところ、彼女はあなた逃れがたい魅力に負けただけなんですもの。

ディッキー その通り、責任は全部僕にかぶせればいい。まるでこの種の出来事をリードするのは男であるかのようにね！ もう二度と彼女には会いたくない。

ペネロペ 何て気の変わりやすい人なこと。

ディッキー 「しきりにペネロペの方へ行こうとしながら」もう二度と気は変わらない。経験して分かったから、これからはいい子にしてるよ。

ペネロペ 「ディッキーとの間に椅子を持って来ながら」とにかく、新しい恋人と付き合う前に、前の恋人と関係を切った方がいいとは思わないの？

ディッキー ああ、でも、手伝ってくれないかな。

ペネロペ ひよっとして、あなたがもうエイダ・ファーガソンを好きじゃないってことを、わたしから彼女に言わせたいんじゃないわよね？

ディッキー 自分で言うのはひどく気まずいことだからね。

ペネロペ 最も気立ての良い女ならちよっとは気を悪くするだろうって、想像はつくけど。

ディッキー ねえ、何か手伝ってくれることを思いつかないの？

ペネロペ 「肩をすくめて」あなた、アリアドネー（ギリシャ神話）の時代からずっと、捨てられた乙女を慰める満足な方法は一つしかなかったわ。

ディッキー 「跳び上がって」ダベンポート伯父さんだ！

ペネロペ ダベンポート伯父様がどうしたの？

ディッキー 昨日、伯父さんが彼女はすごくいい女だと言うってた。

ペネロペ まあ、駄目よ、ディッキー、あなたがわたしのただ一人の伯父様を犠牲にするのを許す訳にはいかないわ。

ディッキー 伯父さんに電話して、彼女はパリに行かなかったって言うだけだよ。

ペネロペ 駄目よ、ディッキー！ 駄目よ、ディッキー！ 駄目だったら、ディッキー！

ディッキー 「電話口で」メイフェアの七五二一番に。伯父さんがひどい目に遭うことはないって約束するよ。深刻な状況になる前に、彼女はランディドノのジョーンズじゃなくてノッティング・ヒル・ゲイトのジョーンズだって言うから。

ペネロペ 「くすくす笑って」あなたがやろうとしていることが必ずしもいいとは思えないけど。

ディッキー ひどいとは思う。あとで散々自分を責めることになるだろうね。

ペネロペ 道徳観念でもね。

ディッキー もしもし、バーローさんをお願いできますか？ もしもし、ダベンポート伯父さんですか？ いえ、僕は結局パリには行かなかったんです。「ペネロペに目くばせして」マック夫人が突然ぶり返して、動かせなかったんです。いえ、ファーガソン夫人も行ってます。

ペイトンが入って来る。

ペイトン ファーガソン夫人が客間にいらしてます、奥様。

ディッキー 「電話で話しながら」何だって！ 三十秒で済みます。切らないで。

ペネロペ 午後ずっと、来るんじゃないかと思ってたのよ。ここまで上がっていただけないかって訊いてちょうだい。

ペイトン かしこまりました、奥様。

出て行く。

ディッキー これじゃ、とても逃げられないね。「電話口で」もしもし。お越しになったらどうですか？ ファーガソン夫人がペンを訪ねて来ていますので、その時に昼食会のことでも打ち合わせすることができます……。結構です。さようなら……。さてと、僕は行くとするか。

ペネロペ この卑怯者！

ディッキー 「非常に堂々としたふうを装いながら」僕は卑怯者じゃないよ、ペネロペ。二分で戻るから。ただ、喉が渴いてるから、ハイボールを飲みたいんだ。

ディッキーはペネロペにキスするためにかがむが、ペネロペは逃げる。

ディッキー ああ、いまましい、一回キスするくらいしづらなくてもいいじゃないか。

ペネロペ 「ほほえみながら」あなたが前の恋人と別れるまで待つてね、あなた。

ディッキー 男が愛妻を胸に抱くのが許されないなんてひどすぎると思うな。

ペネロペ いい子にしていれば、あとで抱けるわよ。

ディッキー ねえ、彼女がちょうど来るころだ。この部屋にドアが二つあるとは、何とありがたいことか！

ディッキーは出て行く。ペネロペは立ち上がって姿見に映る自分の姿を見、ほつれ毛を整えて鼻に白粉をはたく。エイダ・ファーガソンが入って来る。

ペネロペ 「感情あふれるばかりにファーガソン夫人にキスしながら」ああ、あなた……。ここまで上がってもらっても構わなかったかしら。

ファーガソン夫人 もちろん、構わないわ。この部屋は好きよ。正に率直なお話ができる場所だいつも思っていたの。

ペネロペ あなたは何て素敵に見えるんでしょう！

ファーガソン夫人 わたしのフロック、気に入ったかしら？

ペネロペ とてもよく似合っていると、いつも思ってたわ。

ファーガソン夫人 「不機嫌に」これを着たのは初めてなんだけど。

ペネロペ あら、それなら、ほかの人がそれとそっくりなのを着ているのを見たんでしょね。

ファーガソン夫人 あなたは、わたしがここに来てばかりいると思うでしょうね。

ペネロペ ディッキーとわたしはいつだってあなたに会おうと嬉しいのよ。

ファーガソン夫人 オファレル先生はご在宅かしら？ 昨日わたしに処方してくださいましたお薬のことでお訊きしたいことがあったの。

ペネロペ 今はディッキーに会いに来たなんて言わないでちょうだい。わたしに会いに来てほしかったんだから。

ファーガソン夫人 わたしは一石二鳥を狙ったの。

ペネロペ それは常に人に満足感を与える射撃術の離れ技ね。

ファーガソン夫人 あなたがオファレル先生がご在宅だって言ったかどうか忘れたわ。ペネロペ あね、うちの人と知り合ってから十分経ってもディッキーと呼ばなかった人はあなたしかいないと思うの。

ファーガソン夫人 もしそうしたら、お医者様として信頼できないでしょうね。

ペネロペ わたしは決してうちの人に診てもらわないわ。いつもロジャー先生のところに行ってるの。

ファーガソン夫人 あなたは丈夫そうに見えるけど。

ペネロペ わたしはお葬式の費用を節約するために何とか生きて歩いているだけなの。

ファーガソン夫人 オファレル先生はお元気なの？

ペネロペ 疲れてるわ。

ファーガソン夫人 「どうしてかしらと不思議に思いながら」あら？

わずかな間。

ファーガソン夫人 先生がいつ帰るか、ちつとも分からないのね？

ペネロペ 出掛けるなんて知らなかったわ。

ファーガソン夫人 あら、ごめんなさい。出掛けてるって言われたと思ったから。

ペネロペ いいえ。

ファーガソン夫人 わたしが勘違いしたに違いないわ。

ペネロペ うちの人は横になってると思うわ。昨日の夜十二時までお気の毒なマツク

夫人と一緒にだったから。

ファーガソン夫人 「ちよつと驚いて」そうなの？

ペネロペ かなりよくなっていると思えた時に病気がぶりかえすなんてお気の毒ね。

ファーガソン夫人 「当惑するが、それを見せまいとしながら」わたしも口では言えないほど心を痛めたわ。

ペネロペ それに、パリに行く手筈をすっかり整えたあとだったから、あなたにとってはとても都合が悪かったに違いないわね。

ファーガソン夫人 あら、もちろん、わたしは自分の都合なんかちつとも考えなかったわ。

ペネロペ あなたの看病の仕方はほめる言葉もないほどだって、ドイツキーが言うてるわ。

ファーガソン夫人 この世ではお互いにできるだけのことをやらなければいけないと思うの。わたしは義務を果たしただけだわ。

ペネロペ そうする人はとても少ないわ。

ファーガソン夫人 外地で勇敢にお国のために仕えている主人のことを思うと、ほかの人を助けるために、できることはすべてやらなきゃいけないと思うの。

ペネロペは考え込んで胸の中でウインクする。

ペネロペ 最後にあなたはそこにいたの？

ファーガソン夫人 「びっくりして」何の最後ですって？

ペネロペ 知らないなんて言うんじゃないわよね？

ファーガソン夫人 ペネロペ、何のことを言ってるのか、わたしにはさっぱり分からないわ。

ペネロペ でも、ディッキーは今朝ずっとマック夫人と一緒にだったのよ。

ファーガソン夫人 そんなの馬鹿げてる。

ペネロペ あなたには迎えが来なかったのかしら。

ファーガソン夫人 でも……。

ファーガソン夫人は怒りと驚きで言葉が出ない。

ペネロペ じゃあ、本当に知らないの？

ファーガソン夫人 「やけになって」何も知らないわよ。

ペネロペ かわいそうなエイダ。あなたにこんな激しい、激しいシヨックを与えなきゃならないなんて、わたしは気が狂いそうだわ。マック夫人は——亡くなったのよ。

ファーガソン夫人 亡くなったですって！

ペネロペ ディッキーにしてもらったことすべてに感謝しながら、彼の腕の中で亡くなったの。

ファーガソン夫人 あり得ないわ！

ペネロペ あなたがそう言うのも不思議じゃないわ。一日か二日前、彼女は全く元気に跳び回って……。お座りになって、あなた。すっかり気が動転してるのね。彼女のこと、大好きだったんでしょ？

ファーガソン夫人 亡くなったただなんて！

ペネロペ 思う存分泣いたらどう？ ハンカチが見つからないの？ これをお使いなさいな。すごく悲しいことよね？ 彼女のためにあれだけしてあげたんだから。

ファーガソン夫人はハンカチで目を押さえる。

ファーガソン夫人 「自然に振る舞おうと無理しながら」大変なシヨックだわ。

ペネロペ ええ、分かる。お察しするわ、あなた。ディッキーは彼女に対して一心になつてた。あれほどの患者を持ったことはなかったって言ってたわ。「ハンカチを目に当てながら」彼女は唇にほほえみをうかべて、亡くなったご主人の名前を口にしながら亡くなったのよ。ディッキーはいたく感動して、昼食を食べることができなかったわ、かわいそうに。わたしたちはランドーレット型自動車（折りたたみ式幌付きのクーペの一種）を持つつもりなの。

ディッキーが入って来て、見たところ二人の女が泣いているようなので、一瞬ドアのところで立ち止まる。

ディッキー やあ、どうしたの？

ペネロペ 「泣きじゃくって」気の毒なエイダにニュースを伝えてたところなの。

ディッキー 何のニュースかな？

ペネロペ 彼女は知らなかったのよ、マック夫人が——もうこの世にはいないってことを。

ファーガソン夫人 「怒っていることとごまかしていることを隠そうとしながら」本当には知らなかったのよ！

ペネロペ 彼女に知らせてあげるべきだったわ、ディッキー。彼女だって望んでたでしょうに——最期を見届けるのを。

ディッキー わたしはあなたに面倒をかけたくなかったんですよ。

ファーガソン夫人 ご親切ありがとうございます。

ペネロペ そうだと分かってたわ。ディッキーにはそういう優しいところがあるから。

ファーガソン夫人 「怒りを抑えて」そんなこと、わたしはとくに気づいてたわ。

ペネロペ 「夫に向かって」それで、あなたは彼女のことがとても好きだったんですよ？

ディッキー 彼女のことを本当の友人だと思ってたよ。

ペネロペ わたし、マック夫人があなたの腕の中で息を引き取ったってこと、エイダに話したのよ。

ディッキー 唇にほほえみを浮かべてね。

ペネロペ わたしも正にそう言ったわ。亡くなって四十年になるご主人の名前をつぶやきながらってね。何という名前だって言ってたかしら、あなた？

ディッキー ウオーカーだよ、君。

ペネロペ エイダにもっと話してあげてちょうだい。細かいことを聞きたがってるわ。

ディッキー あなたによろしくとのことでした。ご主人にもよろしくと。

ペネロペ 彼女はすべてのことを考えていたみたいね。あなたはお葬式に行かなきゃ、ディッキー。

ディッキー ああ。敬意を表したいね。

ペネロペ 「ファーガソン夫人に向かって」シェリー酒を一杯いかがかしら、あなた？気が動転してるように見えるもの。

ファーガソン夫人 今の——ニュースを聞いてびっくりしたのよ。

ペネロペ 実を言うと、そうなるだろうと昨日の夜思ったの。でも、あなたの気持ちには全くよく分かるわ。

ファーガソン夫人 同情してくださいって大いに感謝するわ。

ペネロペ わたしがシェリー酒を持って来るわ。

ディッキー いや、僕にやらせてくれ。

ペネロペ いいえ、エイダと一緒にいてあげて、あなた。人が困っている時、あなたはともうまいことが言えるもの。

ディッキー 「じりじりと離れながら」こういう場合、女には一緒にいてくれる女が必要なんだよ。

ペネロペ 「ディッキーが移動しないように邪魔ながら」いいえ、あなたは言うべきことを知っているもの。うちの前のコックが辞めると言った時、あなたがどんなに魅力的だったか、わたしは決して忘れないわ。

ペネロペは出て行く。ファーガソン夫人ははじかれたように立ち上がる。

ファーガソン夫人 さあ！

ディッキー びっくりした！ どきっとするじゃないか。

ファーガソン夫人 これはどういうことなの？

ディッキー マック夫人も我々同様いつかは死ぬということだよ。お葬式は明後日ケンサル・グリーンで行なわれるんだ。友人たちは快くこれを唯一の発表と受け入れてくれるさ。

ファーガソン夫人 どうやったらマック夫人が死ぬのよ！ 彼女がそもそも存在しないのは、わたし同様あなただって知ってるのに。

ディッキー 驚いたことに、僕には必ずしもはっきりしなくなり始めている。彼女のことをたくさん話したのだから、彼女のことを本当のことみたいに思える——例えば、銀行預金の残高よりもね。彼女の症例について『ランセツト』に立派な論文が書けるだろうよ。

ファーガソン夫人 「怒り狂って」全くもう！

ディッキー とにかく、彼女は大変な目に遭ったんだ、かわいそうに。手術に次ぐ手術で。生きている価値のない人生だった。彼女は死ぬに決まっていた。苦痛から解放されて幸せだったと言いたいね。

ファーガソン夫人 あなたは昨日の夜どこにいたの？

ディッキー マック夫人のところに行った——いや、もちろん、いなかった。そう言い慣れているものだから、ごく自然に口が滑ったんだ。実にすまない。

ファーガソン夫人 どうしてそんな嘘がつけるの？

ディッキー さあね。習慣になってるんだろうね。

ファーガソン夫人 ペネロペには嘘がばれないようにすることをお勧めするわ。

ディッキー 君は、ばれなければ問題ないって思ってるんだろ？

ファーガソン夫人 まあ、彼女はあなたの奥さんよ。ばれなければ問題ないかどうかは全く別の話だわ。

ディッキー なるほど。

ファーガソン夫人 「なるほど」って言うのはどういうことなの？

ディッキー さしあたりその答えしか思いつかなかったんだ。

ファーガソン夫人 きっと何かを言おうとしたんだわ。

ペイトンがワイングラス二つとデカンターを載せたトレイを持って入って来る。ペイトンが出て行ってしまいうまで二人は黙っている。

ディッキー シェリー酒を一杯飲まないか？

ファーガソン夫人 いいえ、結構よ。

ディッキー じゃあ、君が構わないなら、僕は飲むよ。「自分でグラスに注ぐ。」シェリー酒がまたはやると思うね。

ファーガソン夫人 そうなの？

ディッキー 僕は困った状況でも楽しむコツをわきまえていると常々思っている。「自分に勇気を与えるためにシェリー酒を一杯飲む。」いいかな、君はあまり聞きたくないだろうけど、話したいことがあるんだ。多分、君は僕のことをひどい獣だと思うだろうけど、言わない訳にはいかなくてね。「ファーガソン夫人は答えず、一瞬間を置いて続ける。」実を言うと、僕は陰謀に適した風に造られていなくてね。こういう嘘をつくとはひどく居心地が悪くなる。ペルロペにひどい扱いをしていると思うと嫌なんだ。「また間を置いて」君に本当のことをすっかり話した方がいいね。僕は自分がペネロペをどうしようもないほど愛していることに気づいたんだ。

ファーガソン夫人 「平然として」それで？

ディッキー 「いささか驚いて」それだけだよ。

ファーガソン夫人 で、わたしがそれにどれだけ関心があるって思うの？

ディッキー 「すっかりまごついて」僕が思うに——その……。

ファーガソン夫人は大笑いし始める。ディッキーは完全に面食らい、びっくりしてファーガソン夫人を見る。

ファーガソン夫人 わたしがあなたのことを好きだなんて、あなたは思ったことがなかったでしょ？

ディッキー 「逃げようとしながら」ない、ない。もちろん、男ってのは女が自分を

愛していると思う自惚れの強い愚か者ではあるけれど。

ファーガソン夫人 初めて会った時、あなたはわたしを楽しませてくれたけど、そうしてくれなくなってから随分経つわ。

ディッキー そうに言ってくれてありがとう。

ファーガソン夫人 自分のために物事を片付けてくれる人がいるっていうのは便利だったわ。わたしは女らしい女で……。

ディッキー 世間を知らないからね。

ファーガソン夫人 先月、あなたはわたしを死ぬほど退屈させてくれたわ。わたしはあなたにそれを率直に言わないで示すために全力を尽くしたのよ。

ディッキー 僕はかなり鈍感だったみたいだ。

ファーガソン夫人 恐ろしく鈍感だったわ。

ディッキー でも、お気遣いありがとう。

ファーガソン夫人 「愛想よくにっこりして」わたしがあなたのことをあなた自身の言う「自惚れの強い愚か者」だと言ったら、あなたは失礼だと思うかしら？

ディッキー 僕たちのこれからの付き合いはかなり儀礼的になるかもしれないね。

ファーガソン夫人 これからのお付き合いなんかないでしょうね。
ディッキー だとしたら、もう何も言うことはないわけだ。

ファーガソン夫人はさっそうとしてドアのところまで行って立ち止まる。

ファーガソン夫人 わたしがあなたと初めて会った時と同じように、ペネロペもあなたを手放しで愛してるの？

ディッキー 僕が彼女を愛してるのと同じくらい彼女も僕を愛してるとさえ思っているよ。

ファーガソン夫人 わたしがあなたに書いた手紙はどうしたの？

ディッキー 約束通りにした。すぐに燃やしたよ。

ファーガソン夫人 わたしは燃やさなかったの。あなたの手紙は持ったままよ。

ディッキー 僕の手紙がそこまで興味深いとは思わなかった。

ファーガソン夫人 ペネロペが見れば非常に興味深いと思うわ。

ディッキー ペネロペに送ったらどうなの？

ファーガソン夫人 あなたが反対しなければ、そうしようと思うの。

ディッキー 彼女が知らないことなんか何も書いてないよ。

ファーガソン夫人 「びっくりして、戻って来ながら」彼女に話したって言うんじゃないわよね？

ディッキー もちろん、話してないよ。

ファーガソン夫人 それで？

ディッキー 彼女はずっと全部知ってたんだ。

ファーガソン夫人 何を知ってたの？

ディッキー 全部だよ。始めっからね。

ファーガソン夫人 「おびえて」どうして彼女に分かったの？

ディッキー 神のみぞ知るだね。

ファーガソン夫人 それはわなよ！ 彼女が見掛けほど馬鹿じゃないのは分かっているよ。もよかつたのに。彼女はあなたとの離婚を望んでいて、わたしを利用したんだわ。そんなのって、わたしの夫なら決して耐えられないでしょうね。

ディッキー どんなに優しい夫でも我慢に限界があることは想像がつくよ。

ファーガソン夫人 もう、こんな時に妙なこと言わないでちょうだい。

ディッキー 妙なのはこれからだよ。

ファーガソン夫人 何ですって？

ディッキー 君がそのことで心配する必要はないんだよ。ペネロペは何もするつもりはないんだから。

ファーガソン夫人 でも、それなら、どうして……？

ディッキー 「肩をすくめて」彼女はちっとも気にしてないんだ。

ファーガソン夫人 わたしには分からないわ。

ディッキー 分からないの？ しごく簡単なことさ。大した問題じゃないからだよ。

僕が楽しませてもらったから、彼女は嬉しいのさ。あのことで僕がどれだけ楽しませてもらったか、彼女が分かかってさえくれたらなあ！ あのことについての彼女の見方は——転地療養ということなんだ。

ファーガソン夫人 「怒り狂って」もう！ もう！ もう！ 海辺でやる二週間のゴルフみたいなことなのね。

ディッキー そんなようなものさ。

ファーガソン夫人 彼女があなたと離婚した方がましだわ。

ディッキー どうも、僕は離婚しないよ。

ファーガソン夫人 まあ、何という屈辱かしら！ 彼女はほかに用事があるから、わたしはただ便利だけだったなんて。おかげですべてが何とあさましいことになるとか！ わたしはロマンスにあこがれていたのよ。彼女があなたを溺愛していると思わなかったら、あなたなんか決して相手にしなかったのに。

ディッキー この種のこととは他人に起こる時に限ってロマンチックなんだと思うね。

自分に起こると——まあ、あさましいという言葉がびったりだ。

ファーガソン夫人 「突然思い出しながら」で、マック夫人のことは？

ディッキー ペネロペはそのことについても全部知っていた。

ファーガソン夫人 それって、今日わたしたちが……？

ディッキー 一緒に泣いた時にはもう知っていたかだろ？ 彼女の涙は君のと同じくらい本物だったと思うけど。

ファーガソン夫人 なのに、彼女はわたしが次から次へと何か言うように仕向けたわ。

ディッキー 彼女は僕たち二人をまんまと騙していたんだと思う。

ファーガソン夫人 これから一体どんな顔して彼女に会えばいいのよ？

ディッキー 彼女は大丈夫だよ。彼女は今まで通り感じがいいだろうから。

ファーガソン夫人 この馬鹿！ わたしに対して感じがいいとしたら、自分がわたしよりかわいくて、わたしより賢くて、わたしより魅力的だと思っっているからだっていうことが分からないの？ 彼女はわたしを軽蔑すらしないし、わたしに無関心だわ。「姿見のところに行き、自分の姿を映して見る。怒り狂って」転地療養だなんて。

ドアがゆつくりと開き、ペネロペが入って来る。自動車旅行の服装に着替えている。ファーガソン夫人はペネロペを見ると突然息をのみ、顔をそむける。ちよつとの間、ペネロペは考え深げに二人を見ながら、じっとしている。ディッキーはテーブルの上のものを訳もなく整頓する。

ペネロペ 「かすかにほほえんで」お邪魔じゃなかったかしら？

ディッキー えーと……。

ペネロペ はい？

ディツキー 何でもないよ。

突然、嗚咽とともに、ファーガソン夫人が椅子に沈み込み、顔を隠しながらわっと泣き出す。ペネロペは驚いてファーガソン夫人を見ると、さっと近寄って行く。ファーガソン夫人の肩に手を置いて彼女の上にかがみ込む。

ペネロペ 「優しくといていくらいに」どうしたの？ 本当に泣いてるの？

ファーガソン夫人 「とぎれとぎれの声で」わたし、自分が随分馬鹿みたいな気がするの。

ペネロペ 「ちよっとほほえんで、子供に話しかけるかのように」駄目よ。泣いちゃいけないわ。

ファーガソン夫人 わたしがとんでもない大馬鹿者に見えるわ。

ペネロペ わたしたちの小さな罪が見つかった時に、いたずらじゃなくて馬鹿みたいに見えるのは実にやりきれないことよね。

ファーガソン夫人 わたしはもう二度と自分を尊敬できないわ。

ペネロペ 涙をお拭きなさいな、あなた。ダベンポート伯父様がちょうどいらっしやったところで、あなたを二人だけの昼食に誘っても体裁が差し障りないか知りがっているのよ。

ファーガソン夫人 「少しばかりいつもの様子に戻って」あの方はとても思いやりがあるの。打ち解けたお話しをしたいわ。

ペネロペ カールトンならうってつけの場所でしょうね。

ファーガソン夫人 わたしの目、赤くなってる？

ペネロペ ちっとも。白粉を取ってあげるわ。

ペネロペはテーブルから白粉の箱を取り出し、ファーガソン夫人は物思いにふけりながら鼻に白粉をはたく。

ファーガソン夫人 あの方は好きよ。公爵夫人のことを話すのにみんな下の名前で呼ぶんですもの。

ペイトンがバーローの来訪を告げて出て行く。

ペイトン ダベンポート・バーロー様です。

バーローが入って来ると、ファーガソン夫人はやっと完全にいつもの様子を取り戻す。

ペネロペ 「伯父にキスしながら」ご機嫌いかが？

バーロー 「ファーガソン夫人のところにさっそうと進みながら」これは嬉しい驚きだ。あなたはパリにいるものだと思っていました。

ファーガソン夫人 いえ、お気の毒に、マック夫人が急に悪くなったものですから。バーロー わしにとってはよかった。

ファーガソン夫人 そう言っていただけるとありがたいんですけど、やっぱりすぐにロンドンを発つ予定なんです。

バーロー でも、随分急ですね。あなたなしに我々はどうすればいいのですかな？

ファーガソン夫人 オファレル先生を責めるべきですわ。

ディッキー 「びっくりして」わたしをですか？

ファーガソン夫人 もうわたしは外国の気候に耐えられるだけ丈夫なだから、当然、やむを得ない事情がなければ、わたしが一時間たりとも夫から離れている理由はないって、先生がおっしゃるんです。

バーロー でも、ご亭主はお国のために勇敢に戦っていると思っていましたか？

ファーガソン夫人 それがですね、たまたま今は夫がやるべき戦いがなくて、マルタにとっても素敵な家を手に入れました。それで、わたしは明日発ちますのよ。

バーロー 口では言えないほど残念です。それで、あなたは直行するんですか？

ファーガソン夫人 いいえ、途中パリに一日か二日立ち寄りますの。

バーロー 何て奇遇なんだ！ わしも明日パリに行くようにすっかり手筈を整えてあるんです。

ファーガソン夫人 でしたら、道中わたしの面倒を見ていただけますかしら？ だって、わたしは女らしい女ですから、独りでは列車の中でどうすることもできないんですもの。

バーロー そうできれば光栄ですな。それに、ひよつとすると、あなたがパリにいらっしやる間に、芝居をつか二つご一緒できるでしょうし。

ファーガソン夫人 わたしを危険なところに連れて行かないと約束していただけんなら。

バーロー ハッ、ハッ、ハッ。

ファーガソン夫人 「ペネロペに向かって」それじゃ、あなた、さようならを言わなければ。しばらく会えないと思うわ。

ペネロペ さようなら。

二人は愛情を込めてお互いにキスを交わす。

ファーガソン夫人 「ディッキーに向かって」さようなら。株取引のことでいい情報を耳にしたら、教えてくださいね。「ヨハネスバーグ・アンド・ニュー・エルサレム」から早めに手を引いて損失を食い止めようと思ってるの。

ディッキー 分かった。

ファーガソン夫人 「バーローに向かって」下にタクシーを呼んでありますの。どちらかまでお送りしましょうか？

バーロー それはとてもありがたい。

ファアガソン夫人はディッキーに会釈して出て行く。

バーロー 「ペネロペと握手しながら」素敵な人だ。非常にさっそうとしていて、完璧な淑女だ。

ペネロペ ねえ、いいこと、ダベンポート伯父様、悪ふざけは駄目よ。
バーロー なあお前、わしは高潔の鑑であるだけでなく、五十二なんだぞ。

出て行く。

ペネロペ 「バーローが出て行く時に」ああ言ってプラトニクな恋愛を重んじる気持ちを引き出しているみたいね。

ディッキー 「安堵のため息をついて」フーッ！「ペネロペは姿見の方を向いて帽子を整える。」キョット。

ペネロペ 「驚いたふりをしながら」何だったかしら？

ディッキー 僕にキスしてくれる約束だったね。

ペネロペ そんな約束してない。約束したのはわたしにキスするのを許すってことだったわ。

ディッキー 「ペネロペを両腕に抱いてキスしながら」この小悪魔め。

ペネロペ 済んだ？

ディッキー まだまだ。

ペネロペ じゃあ、続きはまた今度にしてちょうだい。玄関にタクシーを待たせてるの。一分二ペンスかかるんだから。

ディッキー 「後ずさりしながら」何でタクシーが必要なの？

ペネロペ 「笑って」あなたの熱をさまそうと思って。

ディッキー 今から例のいまましい自動車旅行に行こうというんじゃないよね？

ペネロペ 一体どうしていけないの？

ディッキー 「半ば傷つき、半ば驚いて」ペン！

ペネロペ 「腕にしている時計を見ながら」あらまあ、みんなが待っているわ。

ディッキー 「ペネロペの両手を取りながら」もう僕をいじめないでくれ。このいけ好かない自動車旅行の服を脱いできて、気持ちよく一緒にお茶しようよ。

ペイトンに君は留守だったことにすると行って。

ペネロペ がっかりさせてすごく悪いんだけど、約束を破る訳にはいかないわ。

ディッキー 本気じゃないよね？

ペネロペ いったになく本気よ。

ディッキー でも、ねえペン、もうすべてが変わったんだ。僕が君を愛してるのが分からぬの？

ペネロペ そう言ってくれてありがたいわ。

ディッキー 君には何の意味もないって言うの？

ペネロペ あんまりね。

ディッキー 「かなり当惑し始めながら」でも、ねえペン、落ち着いてくれ。君が僕を愛してると同じくらい僕も君を愛してるんだから。

ペネロペ 「ちよっとほほえんで」でも、どうしてわたしがあなたを愛してると思うの？

ディッキー 「びっくりして」君は——君はもう僕のことを愛してないって言うつもりじゃないよね？

ペネロペ 「裁判官みたいに」わたしは——もうあなたがこの部屋を出て行っても、この世の終わりだとは思わないのだ。

ディッキー 何だって……！ 僕の姿を見るのが我慢できないって、どうして率直にはっきり言わないの？

ペネロペ それは必ずしも本当じゃないからよ。あなたのことはとても好きなの。

ディッキー 僕のことを好きだって！ 僕のことを好きなんて、望んでない。愛してほしいんだ。

ペネロペ そうできたらいいんだけど。そうすれば大分面倒が省けるでしょうね。

ディッキー 僕には分からない。これは僕が今まで聞いた中で一番おかしいことだよ。僕はずっと君は僕を熱愛してると思ってたのに。

ペネロペ どうして？

ディッキー 僕が君を熱愛してるからだよ。

ペネロペ いつから？

ディッキー ずっと、ずっと、ずっとだよ。

ペネロペ まさか。

ディッキー ああ、僕が馬鹿なまねをしたのは分かっている。後悔しなくなることは決してないだろう。僕が幸せだったと思うかい？ 僕が楽しい時を過ごしたと思うかい？ とんでもない……。そうか。君は僕を許せないんだね？

ペネロペ 馬鹿な。もちろん、許してるわ。そんなことはちつとも問題じゃないの。

ディッキー 「必死な身振りで」僕には全くちんぷんかんぷんだ。僕はいつだって君を愛してた。一瞬たりとも愛するのをやめたことはなかった。

ペネロペ あなた、そんなにむきにならなくてもいいのよ。どっちにしたってわたしは大して関心がないんですもの。

ディッキー 僕は何て馬鹿だったんだろ！ 君がそんなに冷静に受け止めるのは、単に僕を愛してないからだって、気づくべきだった。女が大騒ぎすれば、単に相手を愛してるっていうことだけ……。君も以前は僕を愛してたの？

ペネロペ ええ。

ディッキー どうしてそんなに移り気なんだ？ 君が僕をこんなふうに扱うなんて思ってもみなかった。「ペネロペが何かを失くしたかのように辺りを見る。」

ペネロペ 何を探してるの？

ペネロペ あなたはユーモアのセンスを失くしてしまったみたいね。それが見つかる

かどうか探していたのよ。

ディッキー 苦しんでいる時に、どうしてユーモアのセンスが持てるって言うの？

ペネロペ 「その言葉に驚いて」苦しんでいるですって？

ディッキー 地獄の苦しみだ。僕は君が欲しい。君の愛が欲しいんだ。

ディッキーはペネロペの顔を見ない。自分がディッキーにもたらし
ている苦痛に対する強い後悔の表情がペネロペの顔に表れる。ペネ
ロペはディッキーに向かって身振りではっきり示すが、すぐに自分
を抑える。

ペネロペ 「あざ笑って」かわいそうな人ね。

ディッキー 「怒って」笑うもんじゃない。

ペネロペ 笑ってなんかいいわ。あなたが本当に気の毒だと思ったのよ。

ディッキー 僕が君にあわれんでほしいと思うのか？

ペネロペ わたしはとても不幸だわ。あなたを喜ばすことが全くできないみたいだも
の。一週間ほど出掛けている方がいいと思うわ。

ディッキー 「跳び上がりながら」いや、君は出掛けないね。

ペネロペ 「眉を吊り上げながら」どうしてそう思うの？

ディッキー 僕が許さないからだよ。

ペネロペ 「ほほえみながら」わたしがあなたの命令に従ってひれ伏すなんて、あな
たはそんな妄想を抱いてるの？

ディッキー 僕はこの家の主だから、敬意を表されるようにするんだ。

ペネロペ あなたが家賃と税金を払うんだから、力で抑えつけるのがお望みならそう
なさっても極めて当然だけど。わたしとしては、今はただ出て行きたいだ
けなのよ。

ディッキー 君は出て行かないね。

ペネロペ わたしの意志に反してここに留めておくつもりなの？

ディッキー もちろんだよ、必要とあらばね。

ペネロペ へー。

ペネロペは立ち上がってドアのところに行く。ディッキーはペネロ
ペを途中で捕まえてドアに鍵をかけ、キーをポケットに入れる。

ペネロペ 乱暴ね。

ディッキー そろそろ僕が完全に馬鹿にされるつもりはないことを見せる時だと思う。

ペネロペは肩をすくめて座る。突然、ペネロペはくすくすと笑う。

ディッキー 笑うことなんか何もないだろ。

ペネロペ あるわ。随分古臭いんですもの。あなたはわたしをパンと水で養うつもり
なの？

ディッキー 「怒って」うぬ。「ペネロペを見る。」さあ、いいかな、ペン、無茶を言
うもんじゃないよ。一体どうしてこの馬鹿げた旅行に行きたいんだ？

ペネロペ あなたがドアを開けてくれるまで、そのことはお話ししないわ。

ディッキー 今は自動車旅行にいい季節じゃない。「間。ペネロペはディッキーが言うことに全く注意を払わずに、まっすぐ自分の正面を見る。」どしゃ降りの雨になって、ひどい風邪をひくよ。恐らく肺炎になるね。「間」僕はひどく衰弱している気がしていて、何かの病気になるかかけているかもしれないんだ。「ペネロペはくすくす笑いをかみ殺して空を見つめ続ける。ディッキーは情熱的に声を発する。」でも、僕が君を行かせないとしたら、それは僕が君を見えないところに行かせるのに耐えられないからだということが分からないの？ 僕には君が必要だ。いつも側にいてほしい。僕を愛してほしいんだ……。ああ、僕がどれだけ君を愛してるか分かってさえくれたら、そんなに薄情にはなれないだろうに。

ペネロペ 「ディッキーの方を向いて極めて冷静な口調で」でも、まさか、わたしのことが好きなら、わたしからちょっととした楽しみを奪おうとしないでしょ。時々喜んで自分を犠牲にしてくれるでしょ。わたしの望みにある程度の敬意を払ってくれるでしょ。わたしが楽しむチャンスが来た時に、馬鹿げた障害物をいろいろ置いて邪魔したりしないでしょ。

ディッキーはペネロペをちょっと見てから顔をそむけ、うつむきながら行ったり来たりする。ディッキーはポケットからキーを取り出して彼女の側のテーブルにそっと置く。

ペネロペ どういうこと？

ディッキー 「打ちひしがれた声で」全く君の言う通りだ。僕は全くもってひどいわがままだった。僕は自分のことばかり考えていた。さぞかし僕は君をうんざりさせていることだろう。多分、二、三日出掛けてきたら君は僕のことをもっと好きになるだろう。

ペネロペはいたく感動してもはや演技を続けることがほとんどできない。ペネロペは自分自身と戦い、すぐにディッキーの両腕に身を投げ出したい欲求を抑える。

ペネロペ あなたがドアに鍵をかけたんだから、できればあなたが開けてちょうだい。

ディッキーは一言も言わずにキーを手にとってドアのところに行く。ディッキーは鍵を開ける。

ペネロペ あなたはわたしの旅行に反対してないと理解していいのね？

ディッキー 行くのが楽しいんなら、君が幸せだと思えて僕は嬉しいよ。僕の望みは君の幸せだけなんだから。

ペネロペ わたしに家においてほしいの？

ディッキー　　いいや。

ペネロペはどきっとする。これは全く彼女が望んでいることではない。

ペネロペ　　まあ！

ディッキー　　僕は君なしではどうすればいいのかわからない。今になってやっと君のことが分かり始めてきたような気がする。まるで——ああ、どう言えばいいのかわからない。

ペネロペ　　でも、あなたはわたしに行つてほしいって言ったばかりなのに。

ディッキー　　僕はもう自分のことは考えたくない。君のことだけを考えたい。君のことを考えると僕はとても幸せな気持ちになるんだよ、ペン。僕は自分を犠牲にしたい。

ペネロペ　　「ほっとして」わたしの部屋に行つて、バッグが下に降ろされたかどうか見てきてくださらない？

ディッキーはちよつと出て行く。ペネロペは顔にうっとりとした表情を浮かべて後に残る。ディッキーが戻つて来る。

ディッキー　　ああ。ペイトンが持つて行つてたよ。

ペネロペ　　それじゃ——「まつ毛の下からディッキーを見る。」——呼び鈴を鳴らして、ペイトンにまた持つて上がるように言つてちょうだい。

ディッキー　　「ほとんど自分の思いがけない幸運が信じられずに」ペン！

ペネロペ　　喜んでもらえるかしら？

ディッキー　　ああ、君は何て思いやりにあふれてるんだ。僕がどんなに感謝してるか、口では言い表せないよ。ああ、ペン、僕が君をどんなに愛してるか、分かつてさえくれたらなあ！

ディッキーはひざまずいて、情熱的にペネロペの両手にキスする。

ペネロペはディッキーを立ち上げらせて彼の首に自分の両腕を巻きつけたい気持ちをほとんど抑えることができずにいる。

ディッキー　　少しでも僕にチャンスはあるの？　前みたいに僕を愛せると思うかい？

ペネロペ　　どうしてわたしに分かるというの？

ディッキー　　ああ、どうして僕たちは最初の頃に戻れないのかな？　あの頃はどんなに愛し合つてたか覚えてるかい？　僕が出掛ける時は君も一緒に下りて来たものだったし、僕が帰つて来ると君はいつも駆け下りてきてキスしてくれた。それに、朝、僕がパイプを吸つて一緒に新聞を読む間、君がどんなふうにも僕の椅子に座つていたか覚えてるかい？

ペネロペ　　「ほほえみを隠しながら」さぞかし嫌だったんでしょ！

ディッキー 嫌だって？ 生涯であんなに幸せなことはなかった。

ペネロペ とにかく、わたしが望むのは、わたしたちがずっといい友達であり続けることなの。

ディッキー 「跳び上がって」友達だって！ 僕が君の愛情を欲しがっている時に、友情を差し出して何の役に立つんだ？ どうして君はぼくをそれほどまでに不幸にすることができるんだ？

ペネロペ 「寛大にほほえみながら」でも、わたしはあなたを不幸にするつもりはないわ。ずっと楽しく気持ちよくして欲しいのよ。

ディッキー そのために僕が何を望むと思うの？ ペン、僕を愛するように努力するって約束してくれ。

ペネロペ 「にっこりして」ええ、お望みなら、努力するわ。

ディッキー 僕は君が僕を愛するようにさせるつもりだ。君の愛を確信できるまではとても心が休まらない。

ペネロペ そして、あなたがわたしの愛を確信できた時には、もうわたしにはちっとも構わなくなるんですよ？

ディッキー 僕を信じて！ 信じてくれよ！ 「またペネロペの両手にキスする。ペネロペの顔は見えない。ペネロペはほほえんで頭を振る。」君がこんなに愛おしかったなんて知らなかった。君の手にキスするだけで僕は喜びでいっぱいだ。

ペネロペはちよつと笑って離れる。

ペネロペ さあ、ちよつとヘンダーソン夫妻のところへ行って自動車旅行には行かないって言わなければ。

ディッキー 電話する訳にいかないの？ 僕の見えないところに君を行かせたくないんだ。

ペネロペ あの人たちは電話をつけてないの。わたしが行った方が都合がいいのよ。

ディッキー 分かったよ。君がそうしなければいけないと言うんなら、そうしなければいけないだろうから。「ペネロペはほほえんでドアの方に向かって行く。ペネロペがドアに到達すると、ディッキーは止める。」ああ、ペン！

ペネロペ はい。

ディッキー 何時に帰るの？

ペネロペはこの言い回しを思い出しておかしがっているしぐさをし、ディッキーに素早く投げキッスをしてドアからそつと出て行く。

終わり